



シネマ気球

第39号 200円

シネマ気球 ©

編集兼発行人 関田孝正
〒270-0107
千葉県船橋市西栗井 339-2
TEL 04 (7153) 1533
FAX 04 (7156) 7122

「ハウス・ジャック・ビルト」

おぞましく、むかしく、お薦めできない作品だが…

最初に断っておくが、この映画は観なければよかったと後悔するはず。お薦めはしない。

しかし、私を強烈に魅了し、記憶に焼き付いた作品だ。思い返しても、おぞましく、むかつくが、映像はきれいで、死体すら美しい。物語は建築家の殺人鬼ジャックの告白譚。

五件の犯行が気分の悪くなるほどリアルに、克明に描かれている。第一の殺人は傲慢な女性殺し。第二の殺人は刑事を装い、一人暮らしの女性宅に言葉巧みに侵入し、女を絞殺。面白いのは、部屋からの逃走時、現場の血痕が気になり何度も血糊を拭きに部屋に戻り確認する場面。脅迫観念にとらわれているうちに警官が出現。ジャックは間一髪で脱出。遺体は車のトランクに、隠す暇なくシートに包んだままロープで引きずり逃走。血のりは、犯行場所から遺体保管場所の冷凍倉庫まで続くが、都合よく激しい雨がその痕跡を洗い流す。犯行は発覚することなく、残酷かつ大胆になる。

母とその二人の子供たちを、ピクニック先で狩りをするように、猟銃で一人ひとり追い詰め殺す場面は非情で無情。救いが無い。殺

人の告白ごとに男は、湖の見える土地に家を立てようとするが、気に入らず破壊。多数の死体が冷凍倉庫に積みあがる。

この監督は2000年に「ダンサー・イン・ザ・ダーク」で、絶望的な救いのない結末の後味の悪さが忘れられない映画を作っている。カンヌ映画祭のパルムドール受賞作の評判につられて観たが、観なければよかったと、暗い気分になり、落ち込んだ記憶がある。でも、なぜか未だに思い出す映画だ。

監督の名は、ラース・フォン・トリアー。

ジャックを演じたのはマット・デイロン。

殺人鬼ジャックは、凍った死体を材料に冷凍庫内に家を作りひきこもる。唐突に挿入されたドラクロアの絵「ダントの小舟」を、俳優たちが生身で再現したシーンが、目に焼き付いて離れない。ジャックが地獄へ落ちるラストがあったおかげで、私は二十年ぶりの監督不信に落ちることなく、救いを感じた。

(絵と文・山下雄平)

ふたつの作品に見るチャーチル像

門馬徳行

彼は本当にヒトラーから世界を救ったのか？

「ウイントン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男」

2018年に前後して公開された2本のウイントン・チャーチルを主人公にした作品について考えてみたい。1本目、「ウイントン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男」(監督IIジョー・ライト)は、チャーチルを演じた曲者ゲイリー・オールドマンの特殊メイク(辻一弘によるメイクでアカデミー賞授与)が話題となったが、主に描かれているのは第二次世界大戦におけるダンケルク撤退作戦だ(クリストファー・ノーランもこの様子を「ダンケルク」で描いている)。ドイツ軍に追い詰められた30万に及ぶイギリス兵(一部にはフランス兵もいたらしい)を救おうと、民間船まで動員して決行したダイナモと呼ばれている救助作戦。これを指揮し

たのが、当時首相になりたてのチャーチルだった。ここで大きなポイントになるのは、30数万の兵を救うために犠牲になった2000名(一説には4000名)のイギリス兵のことである。チャーチルは大義のためにかれらを見捨てるいや、見捨てざるを得ない。これは、国家、国民を守るためには、やむを得ない選択だった。彼らは、故国を救うために命を落としたのだ。だが、この代償はチャーチルにとつて大きかったのではないか。チャーチル本人は、かなりの奇人変人で、その失策(第一次大戦での作戦失敗で多くの死傷者をだしてしまった)と、わがままな性格で周りからはきらわれていたそう

だ。朝から酒を飲み、葉巻をくらい、融通がきかないその振る舞いは頑固爺に見えても仕方ないだろう。国会でも孤立無援、ただ当時の国王ジョージ6世(「英国王のスピーチ」)が彼を支持していたのが救いだっただよう。ダンケルク撤退後、制空権を握ろうとするドイツ空軍のイギリス本土への激しい空爆が続いたが、なんとか大英帝国は持ちこたえる。この闘いは「バトル・オブ・ブリテン 空軍大戦略」が詳しい。「ヒトラーから世界を救った男」に登場するのは、むさ苦しい男どもが多かったが、その中で秘書役のリリー・ジェームズ(「ベイビー・ドライバー」)がキラリと輝いていたし、さらにチャーチルを叱咤激励する妻役のクリスティン・スコット・トーマス(「イングリッシュ・ペイシエント」)も、とても重要な役柄でパンチを効かしていた。チャーチルは四面楚歌、周りに追

い詰められたが、この女性たちの協力もあり、なんとか無事に難局を乗り切る。延々と空爆が続く中、ドイツへの和平工作も動き出す。彼は断固としてヒトラーを倒すべく行動する。この確たる信念は、ナチス打倒の一念からきていると思われる。チャーチルが人々の声を聞こうと、地下鉄の中で市民に会う、わざとらしいシーンもあった。が、かれら、国民の支持がなかったら最後の4分間にわたる演説(和平はせず、断固ドイツと戦い抜く)は、共感を得なかつたろう。彼は、自分の回顧録でノーベル文学賞をとつたこともあり、言葉の魔術師とも言われた。だから、言葉で民衆を鼓舞するのは上手かった、と言われていた。が、ある意味これはかなり危険で、あの独裁者ヒトラーと手法は同じである。迷う民衆が強力な言葉に惹かれることは歴史が示している。この作品はチャーチルという政治家のすべてを描いたのではない。首相に就任してからダンケルク撤退までの27日間を描いたにすぎない。没



「ウィンストン・チャーチル ヒトラーから世界を救った男」ゲイリー・オールドマン



「チャーチル ノルマンディの決断」ブライアン・コックス

後に公開された内閣閣議記録をもとにしているのが、事実に沿った話だろう。ここで、邦題のサブタイトル(原題は「DARKEST HOUR」、最も暗い時間)について。本当にチャーチルはヒトラーから、世界を救ったのだろうか。確かにこの後、第二次世界大戦は連合国側の勝利(ソ連参戦が大きい)に終わる。あそこで、彼がヒトラーに屈せず徹底抗戦を続けたからこそ勝利につながったといえる。もし、ヒトラーがイギリスに上陸していたら、第二次大戦後の世界情勢は大きく変わっていた可能性はある。そこから見ると、彼はナチから世界を救ったと言えるかもしれない。しかし、彼自身は世界全体をヒトラーから救

おうとは微塵も思っただけでなかったらう。彼の頭の中は、まず、イギリスを守るためにナチを倒そうとする気持ちだけが渦巻いていたのではないだろうか。

「チャーチル ノルマンディの決断」

そして、2本目が、ダンケルク撤退の4年後、ノルマンディ上陸作戦決行までの96時間を描いた「チャーチル ノルマンディの決断」だ(まだ、第二次大戦は終わっていない)。こちらは、あまり宣伝もなくひっそりと公開された。キャストもブライアン・コックスという地味な俳優(名バイプレイヤー)がチャーチルを演じている。

特殊メイクはなしだが、これが意外と様になっていて、過去の失敗に苦しむチャーチルの感じがよく出ている。「ヒトラーから世界を救った男」では触れなかった別のチャーチル像がでてくる。が、史実をもとにしたオールドマン版とは違って、かなりフィクション部分は含まれているらしい(問題は、どこまでがフィクションでどこまでが事実という見極めだろう)。そのため、むしろチャーチルの「伝記」として観た方がいいという意見もある。海外では、この点が酷評されたそうだ。それは、すでにアメリカ中心(アイゼンハワー連合国軍最高司令官)で進行していたノルマンディ上陸作戦に、チャーチルが強く反対し、作戦を修正したいという行動に出たからだ。さらに、意見を無視され強行された作戦当日が、雨で延期になるように祈ったというのだ。チャーチルが雨ごいをするとは、ちよっと信じがたい。が、信じられない事実などいくらでもあるがこの世界なので、一概に否定はできない。このことは、前述した自分の失策で第一次世界大戦のガリポリの戦いで戦死・戦傷者約14万(50万という説もあり)を超える

犠牲者をだしたことと、ダンケルク撤退で自国の兵士を見殺しにしたことなどが要因でないかと思われる。即ち、兵士たちの命をおもんぱかったヒューマンな気持ちだが、こういう行動にでたのだろう。ノルマンディでもかなりの戦死者が出ることは十分に予想されていたが、すでに三者会談(米、英、カナダ)で同意されていた上陸作戦に、直前で反旗を翻すことはありえないだろう。やや迷ったというのが、真実かもしれない。そこを監督ジョン・サウン・テプリッキーは拡大解釈したのではないか。頑固一徹のチャーチルにもそういう優しい面があったのではないかと。しかし、アメリカ側は国王を動かさず、ごねる彼の意見を凍結させ、上陸作戦を決行する。国王が切々とチャーチルを諭すシーンは、この作品の大きな見せ場であった。もはや、アイゼンハワーはチャーチルの意見など聞く耳を持たなかった。それだけ連合国側は追い詰められていたのだ。冷静に見れば、ヒトラーを倒すためにはこの上陸作戦は必要不可欠だったのである。この作戦の様子は「史上最大の作戦」や「ブライベート・ライアン」などでも克明に描かれている。過

去のトラウマに苦悩するチャーチ

ル、たしかに、物語としては面白い。ただ、戦闘シーンはほとんどなく、室内の対話劇がメインで息が詰まってしまふ。単調な展開で開放感が乏しい。ここは上陸作戦の様子とか、ドイツ空爆の有様とかを入れた方が良かったのではないか。会議が行われるのどかな田園風景のシーンが多いのも影響している。やはり、こういう歴史的な事実を扱った映画は、重層的な展開がないと、うすっぺらな印象に終わってしまう。この作品でも、チャーチルをフォローする妻(ミランダ・リチャードソン「スリーピー・ホロウ」)との関係が時間をとって描かれ、さらに秘書(エラ・パーネル「ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたち」)とのつながりもちゃんと抑えている。両作品を通して見ると、孤独なリーダーを精神的に支えたのは2人の女性だった、という知られざる裏面が浮かんでくる。作戦決行に悩み、静かな海岸に立ち尽くすチャーチルのワンショットが、なかなか印象的だった。もし、先のダンケルク撤退が失敗していたら、ノルマンディ上陸作戦が果たして成立したかどうか、わからないときえ言

われている。

さて、ここでびっくりするような事実が先日放映された。第二次大戦終末、アメリカに同意し日本に原爆投下を促したのは、なんと、チャーチルだったというのだ。さらに、原爆はアメリカのみで作られたのではなく、チャーチルは多くの科学者を送り込み完成を急がせていたのだ。あの真珠湾攻撃の2年前から、この計画は始まっていたらしい。もともと原爆はドイツに対して使う予定だった。が、ドイツは降伏し、早く戦争を終結させたかったのか、すでに原爆を研究していたソ連への牽制だったのか、瀕死の日本に投下される。これは、戦中の裏面史としてかなり興味深い。イギリスにとって、チャーチルは国民的英雄であろう。彼はヒトラーから国民を守ったのだから。でも、原爆を落とされた日本から見ると、かなり厄介で危険な人物に見えてきてしまう。

このようにひとりの人間の行動や理念は容易にわかるものではなく、一面性も二面性もあり深い謎に包まれている。映画はその闇の中に、どれだけ肉薄できるのであろうか。どれだけ真実に迫ることができるのであろうか。果てしなき映像世界の可能性に、ただ期待するのみである。

「我々は最後までやる。フランスで、そして海で戦う。日々自信と力を強めつつ空で戦う。いかなる犠牲を払おうとも我らの島を守る。我々は海岸でも、水際でも戦う。野で街頭で丘で戦う。……我々は決して降伏しない。」
(ウインストン・チャーチル「ダンケルク撤退作戦完了後の議会演説」)

字幕翻訳者、平澤真未さん

「恋の十日間」(監督ウイリアム・デイターレ)
1944年、戦時中の映画(日本公開は1946年)だ。DVD(発売元Jユネス企画)で見たのだが、戦前の映画にもかかわらず画質も悪くない。白黒スタンダードサイズが懐かしい。犯罪(過失致死あるいは正当防衛のような)を犯して刑に服し模範囚として仮出所した女と日本軍と戦って戦争神経症になった男、どちらも心の傷を負った者同士の恋物語だ。かつての戦争の時代を反映している。心の葛藤をどう乗り越えていくのか。クリスマス・マス・イブから年明けまでの10日間の話。原題は「I, I, Be Seeing You」。主演はジンジャー・ロジャースとジョセフ・コットン。

チャーリー・テンブルがジンジャーの従妹役で出ている。私が子供のころ、なにかのテレビ番組で司会者として登場していた。私の亡母(大正13年生まれ)は「テンブルちゃんだ。大きくなった」と、昔子役として有名だったことを教えてくれた。

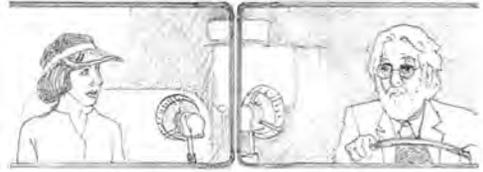
字幕翻訳は平澤真未。本紙に執筆している堀江広子さんの娘さんだ。
字幕は洋画を見るときになくはならないもの。字幕がないと洋画の面白さは半減するだろう。それどころかさっぱりわからず映画を楽しむないだろう。映画の展開に合わせて、映画に集中できるようにできるだけ短い言葉で的確にセリフのエッセンスを観客に伝えなければならぬ。計り知れない。字幕翻訳者の苦労は計り知れない。いい字幕をつくるために経験の積み重ねも必要だろう。ときとして名翻訳は長く観客の記憶に残る。そんな翻訳が一つでも多く生まれることを願いたい。

堀江さんによると、平澤さんは東京で映像翻訳の仕事をしており、金沢映画祭では、ほぼボランティアで字幕制作を毎年やっているとのことだ。平澤さんの今後の活躍に期待したい。(関田孝正)

私のお気に入り 4 押切令子



末期ガンのエラは入院当日、アルツハイマーの夫とともに思い出の詰まったキャンピングカーで旅に出る。道中にくり広げられるエピソードは、50年連れそった夫婦の、普通の生活と究極の愛を語る。



ウケを付け毎日おしゃべりなエラ。そこには気持ちまで病にのまれまいとする強い意志があらわれている。

キャンピングカーで旅をするというのに、ジャケットにネクタイ。教師だった頃の出勤の姿……



病気の進んだジョンは現実と過去をさまよう。現実にいる時間は徐々に減り、ふっと自分を失った時に見せる不安の表情がとても切ない。



80を過ぎても衰えないドナルド・サザラントの色気に脱帽。色気のポイントは目と口と。お腹が出たって眼光は鋭い!

LONG LONG VACATION



ジェーンだ

子どもの顔は忘れても、教え子の顔は覚えているのね



ハ

嫉妬だつてする……



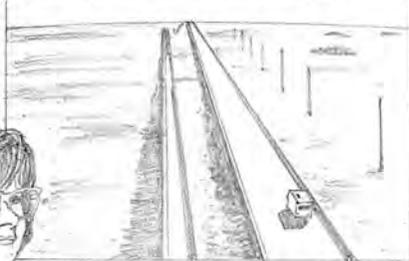
ダン(昔の男)のところに連れて行け!

ハ

とまどう夫に
とっとう寄り添う



フロリダの青い海に果てしなく続く道の先には



二度と離れないでくれ
約束だ



監督：パオロ・ヴェルズイ
エラ/ヘレン・ミレン
ジョン/ドナルド・サザラント
原題：The Leisure Seeker
2017年 イタリア

田舎の映画生活2 — 月いちで映画へ行こう! —

岩館範子

月いちで映画館へ行こう!と心に決めていたのに、なかなか思うようにはいかない。でもまあ、前回よりは多く観られた。

① 『ヴェノム』 2018

敏腕記者のエディ(トム・ハーデイ)は取材中、邪悪な意志を持った地球外生命体に寄生されてしまう。容赦なく人を襲うその凶暴な生命体に恐怖を感じつつも、徐々にその圧倒的な力に魅せられていき…。スパイダーマンの宿敵にして、マーベルシリーズの悪役の中で最も人気。

宇宙から来た寄生物がシンビオート。それとエディが融合して生まれたのがヴェノム。寄生される人間によって違ったキャラが生まれるってこと。コミック読んでないからヴェノムは仲間がいるってびっくり。ゲームでカーネイジというのがいるのは知ってたけど。今回は、エディが取材してたライフ財団のCEOカールトン・ドレイク(リズ・アーメッド)と融合したシンビオート、ライオットと戦うことになる。ライオットが一番強いんだって。手が刀みたいになつてヴェノムは勝てそうもなかったもの。

久々にハーデイを観たくてチョイスしたけど、期待しすぎなのかあまり盛り上がりせずに終わった気がする。他人から見れば一人言、シンビオートと話し一体になる事を受け入れる?受け入れない?どうするの?つとてこれが映像的にも面白かった。エディの善なる意志があるから、ヴェノムは善行をし、ヒーローになつていくんだから。冒頭のハーデイの黄色いシャツ姿が何だかよかった。彼女アン(ミシェル・ウィリアムズ)と別れ、住んでいる汚いアパートやバイクに乗ってるのも〇。

② 『アクアマン』 2018

全米公開から5週間で全世界興行収入10億ドル突破。(すごい!)人間として育てられた、アトランティス王国の血を引く男—幼少の頃から、全ての海の生物を操る能力を持ち「アクアマン」と呼ばれるアーサー(ジェイソン・モモア)が、海洋汚染に怒り巨大モンスター軍で人類を攻めるアトランティス軍に立ち向かう。

ストーリーはよくわかっていなくて、誰かが水中でバトルする作品なんだくらいに思ってたら違った!『ジャスティス・リーグ』のアクアマンの話だった。誰なの?このかつこいい俳優は。どっかで観たことあるようなないような…。この人誰だっけつとつと考えながら観終わってしまった。パンフレットを観て納得。TVシリーズの『ゲーム・オブ・スローンズ』でカール・ドロゴ役。この役はかつこいいんだけど、ワイルドすぎて正直微妙。

このアクアマンは、時速150キロで泳ぎ、人間の150倍の力つて、強すぎない?海底王国アトランティスの王オームはハンサムだけど地味なパトリック・ウィル

ソン。びったりだった。アクアマンの弟に当たるけど、それ程の力はないのに海の霸王「オーシャンマスター」を目指す。回りは振り回されっぱなし。アクアマンになるため鍛えてくれた王国の重臣バルコ(ウイレム・デフォー)が強そうで存在感あるし、アクアマンを導いてくれる。何たって声がいい。デフォーのバルコあつての作品だった。強すぎるアクアマンとの戦いで、父親を亡くした海賊デイビッド・ケインはオーム王と組んで、科学技術を利用して強力なスーツを完成させた。それがブラックマンタ。アクアマンの強い肉体すら傷つける破壊力がある宿命の、2人の対決の時はきてしまう。お約束の伝説の三叉槍(トライデント)もちゃんとでてきた。アクアマンの最初の原子力潜水艦でのバトルが無双ぶりがわかって圧倒される。海底王国はきれいだった。アクアマン主役もつと観たい。

③ 『グリーンブック』 2018

1962年。アフリカ系アメリカ人のピアニストのビクター・シヤリー(マハーシャラ・アリ)がコンサートツアーを行うため、イタリヤ系の運転手トニー(ヴィゴ・モートンセン)とアメリカ南



「グリーンブック」ヴィゴ・モーテンセン

に好きにな
っていつて
結局出演す
ることにな
った。最初
20kgも太っ
ての登場に
はびっくり
トニー本人
もだが食べ
てばかり

部をキャデラックで巡る。携帯し
ているのが、「黒人ドライバーの
ためのグリーンブック」という、
黒人が利用できるホテルなどをま
とめた小冊子。これを頼りに旅を
進めるが、様々な差別に遭遇。ト
ラブルに対処するうちに信頼関係
が生まれる。実話から生まれた物
語だ。

この役、モーテンセンにはどう
なの？合うのか。けど思い出した
彼が主演の『イースタン・プロミ
ス』は大好きだった。かつこよか
ったもの。でも本人は、イタリア
系ではないのに、イタリア系をス
テレオタイプするような演技をす
べきではないと思いつつも断つた
らしい。でもその度に監督のピー
ター・ファレリーにオファーされ、
その度に脚本を読み直し、その度

のキャラだった。途中でやせてし
まい、寝る前に何か食べて下さい
と言われその通りにしたんだって。

トニー本人はないと言うが黒人
への偏見は大あり。がさつで、ド
クター・シャリーに、言葉づか
いを直されたり、注意されてばか
り。どうなることかと思つたけど、
彼の演奏を聴くと天才だ！と興奮
する。その辺りから2人の距離が
近くなり、トニーの妻ドロレスへ
の手紙の書き方のアドバイスをく
れる。受け取った妻は大喜びだ。
黒人のソウルフードでもあるフラ
イドチキンを食べたことがないド
クター・シャリーに食べさせよ
うとする。手が汚れるからいやが
るが、結局受け入れてくれる。そ
んな2人のかけひきが面白かった。
南部の人種差別はひどい。ジョ
ン・F・ケネディが前年に大統領
になり、ロバート・ケネディが司
法長官に就任している時代だ。自
分の目で世界を見たかったのだろ
うけど勇気ある決断をした。2人
はいろんなトラブルを乗り越え、
ニューヨークに無事戻ることがで
きる。2019アカデミー賞で作
品賞をとるだけあつていい作品だ
つた。

④ 『マスカレード・ホテル』2019

東野圭吾原作のミステリー、『マ
スカレード』シリーズ第1作の映
画化。

ホテルを訪れる人はみんな「お
客」という仮面をかぶつていて得
体が知れない。様々な宿泊客たち
が登場する。連続殺人事件の次の
犯行現場予告が高級ホテル・コル
シアを示していたので、潜入捜査
を決断。警視庁捜査一課の刑事・
新田（木村拓哉）は、フロント・
クラークとして犯人を追うことに
なる。ホテルマンとしての仕事に
誇りを持つフロント・クラーク山
岸尚美（長澤まさみ）は、「素人
にお客さまの対応をさせるべきで
はない」と反発するが教育係を命
じられてしまう。お互いの立場の
違いから何度も衝突を繰り返す。
木村と長澤の初共演は気になつ
ていた。2人の会話がテンポよく、
いい空気がでていて面白かった。
私は接客業をしているので、客、
お客さんではなくお客様、「ルー
ルはお客様が決める」というのは
よくわかる。その通り！と思つた。
登場人物が多すぎる。ホテルマン、
刑事、潜入捜査中の刑事、お客様。
俳優はみなひとくせもふたくせも

ある人たちがばかりで、落ちつか
なかつた。映画の世界なんだけど、
ホテルに潜入捜査の刑事が多すぎ
てバレてると感じた。少し前の作
品だけど、リクエストで再映で観
る事ができた。木村拓哉を観られ
てよかった。

期待してた『ボヘミアン・ラプ
ソディ』『アベンジャーズ/エン
ドゲーム』を観られず、レンタル
する場もなくいつになったら観ら
れるのかわからない。TVで放送
するとしても吹替だから好きでは
ない。深夜、『アンタツチャブル』
やるんだ！と思つたら日本語しゃ
べつた。映画を観るためには
1度はあきらめたポータブルDVD
Dプレイヤーで観るしかない
『リバー・ランズ・スルー・イツ
ト』『スーサイド・スクワッド』
『ジャスティス・リーグ』『エイ
リアン・コヴェナント』を観た。
1度観たものはいいけど、初めて
のものはやっぱりスクリーンで観
たいもの。『エイリアン・コヴェ
ナント』は小さい画面でもよかつ
たかな!? この映画砂漠から抜け
出したい。

トランプの分断と対立を乗り越えて

「華氏119」を観て

片桐公男

トランプ米大統領が誕生して2年、その特異な言動は米国内だけにとどまらず何かと波紋を広げてきた。その大統領の2年間を米国民がどう評価するのか? 「イエス」と肯定するのか? 「ノー」と否定するのか、米国民だけではなく日本国民も中間選挙結果に注目した。私もその一人だった。

選挙結果が明らかになる11月7日(水)、私は映画館へ足を運んだ。娯楽映画ではないのに結構お客さんは入っていた。

映画館に向かう前に「どんな場面から映画が始まるのか?」自分なりに予測した。「大統領選挙でトランプが勝利した勝利宣言する場面からはじまる」と予測したが、それとは逆にヒラリー・クリントンの投票日前日の集会場面から映画ははじまった。主要マスコミも選挙通もヒラリー・クリントンの勝利を誰も信じて疑わなかった。

しかし選挙結果は、ドナルド・トランプの勝利となり多くの予想を裏切る結果となった。

「アメリカ・ファースト」を叫ぶトランプ

アメリカ・ファーストを叫ぶトランプは、黒人や有色人種、そしてイスラム系の人々を敵視する言動を繰り返してきた。「メキシコとの国境に壁を築け」と叫び、イスラム系の人々の入国を拒否するなど、これまでの米国の常識を覆す政策を次々と強行してきた。

また、自国利益を最優先するためにTPPからの離脱、温暖化対策パリ協定からの脱退等々、オバマ前大統領がすすめてきた政策を覆すことを躊躇なく実施してきた。

国民の二極化・分断化

トランプ流のやり方は敵をつくり口汚く攻撃することにその特徴があり、米国内でも対立と分断をすすめてきた。私も40代2回兄が暮らす西海岸を訪ねアメリカ社会をかいま見てきた。黒人やアジア系国民が仲良く暮らし「懐が深い国だなあ」との印象を受けた。しかし、トランプ大統領の誕生によって状況は一変した。白人対黒人

・有色人種、イスラエル対アラブ、ユダヤ教対イスラム教等々の対立を煽り国民の分断を極限まで推し進めてきた。その結果米国社会はこれまでみられなかった深刻な対立が進んでいる。

立ち上がる労働者・若者

「華氏119」では、ひどい待遇改善を求めてストライキに立ち上がる教師たち、そして高校での銃乱射事件から銃規制を求めてデモ行進する高校生たちの行動が描かれる。また、ベテラン民主党議員たちの体たらくからその刷新を求めて立候補する若手、女性議員候補にもスポットをあてている。

ニューヨーク州第14区から民主党新人女性候補として立候補するオカシオ・コルテス氏(29歳)は反トランプの旗印を掲げ見事初当選を果した。同氏を含め4人の人種マイノリティ女性新人候補が当選を果たした。

「まだアメリカ社会は捨てたものではない」と観ていた私は意を強くした。

映画の最終画面には「自由の女神像」が映しだされるが、自由と民主主義の象徴であるとともに、19世紀以来絶えることなく世界各

地からやってくる移民にとって新天地の象徴ともなっている。マイケル・ムーアが米国民と世界へ向けて言いたかったことが伝わる映画だった。

米国だけでなく「ミニトランプ」が、ヨーロッパや南米にも「輸出」されている。2017年9月のドイツ連邦議会議員選挙では、極右政党「ドイツのための選択肢(AfD)」が第三党に躍進した。南米ブラジルでは、「ブラジルのトランプ」と言われる元軍人のボルソロナ氏が大統領選挙で勝利するなど、トランプの影響は世界に拡散している。米国の歴史学者は、「華氏119」の中で1930年代のファシズム再来を警告していたが、私たちもその再来を十分に警戒しなければならぬだろう。

中間選挙結果が出て

映画を観たその日の夜、日本のTVニュースは、米国の中間選挙結果を伝えていた。その論調の主題は、「下院で民主党が多数派を奪還、上院は共和党、下院は民主党が多数となり『ネジレ状態』となりトランプは議会運営が難しくなるだろう」と。

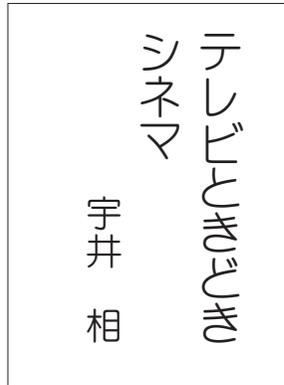
私が関心を持ったのは、トラン

プの国民分断政策に危機感を持った国民が自由と民主主義を守るために立ち上がり自らの手で政治を変えようとしていることだ。その象徴として若者（18〜29歳）の投

票率がある調査では前回選挙と比べて10%も上がったこと。第二は民主党の中にあつて民主的社会主义者と言われるサンダース派の新人候補が当選したことだ。反トラ

ンプを掲げて国民に団結・寛容を訴えてきたマイノリティ女性候補者など、市民運動から生まれた「市民派」議員の誕生は、紆余曲折があるだろうがランプの分断

2018年11月記



週一のペースで映画館に通い狙った新作は、絶対に見逃さない。などと熱く語り出す御仁の映画論を聞くと、彼の時間と経済の余裕が羨ましいと思うし、俺たちそこ

いところで、思わぬ名作に出会える可能性がある。下手な例えだが、定食屋に毎日通って日替わり定食を注文していたら苦手な料理を出され、不承不承で口にしたら美味いものだったと気付くような良さがある。実際、このようにしてア

ニアツクな作品だとおまけでメイキング映像盤が付くことがあり、これが面白い。監督や俳優陣の素顔や苦勞話に触れると、ますます作品を好きになる。

部屋の裏から出て映画館へ行こう。興味があり自発的に鑑賞するタイトルは、もともとの期待値が高い分、評価が甘い。そのバイアスも含めて本当に好きになったのが〇〇〇（タイトル内緒）。繰り返すこと六度も映画館に足を運び、DVDが発売されると知るやプレーヤを持っていないのに予約。DVDが手に入ってからしばらくは、ライナーノートを読むだけであつた。もう何年も前の出来事、いつ

そのかわりテレビで放映される映画番組は、たくさん観る。正確には、毎週の定時設定により自動で録り溜められたものを週末に処理する。

でも残念ながらこう言うケースは、まれ。ほとんどの場合は、最初の数分で楽しめないと感じ、早送りをしながら様子を見定め、本当につまらないと判断したら即、消去。

熱を上げると、見境をなくすから怖い。最近では、映画好き友人A氏からそれほど興味のない戦争映画に誘われ、これに付き合つた。座席は、スクリーン全体を俯瞰できる

と対立を乗り越え民主主義と融和のアメリカをきつと実現してくれことだろう。それを期待したい。

これが良いのは、ジャンルの好きや嫌いかかわらず問答無用で新旧様々な作品に触れざるを得な

テレビの映画番組も良いけど本当に好きな映画は、DVDで持ちたい。収納や経済的な理由で何枚もコレクションするのは、難しいがチェーンのリサイクル店を利用すると云う手がある。ちよつとマ

音響も強烈。鋼と鋼が擦れ合い軋む履帯。唸るエンジン。狭い戦車内の怒号。戦車砲の発砲音、砲弾が浅い角度で装甲に接触してはじき飛ばされる金属音、そして命中弾の炸裂音。手に汗にぎる戦局、ストーリー展開に時を忘れて見入る。さつきまで座席の位置が悪いとかで不機嫌だったけど?...

...そうだったけ?

—読者から—

<第6回>

警備員室弁護論

農律捨丸

関田監督、また一年間お会いすることなく過ごしてしまいました。お変わりないでしょうか。どうしていつもこうなるのかと考えながら、つい脱線をして自分の歩みを計量してみました。何回もお話しています。私が自宅周辺の県立公園の夜間巡回警備員となつて、もう六年目になります。だいたい三日に一晚、夕方から翌朝まで、仮眠をはさんで、二人一組でのパトロールにはげんでいるわけですが、一上番に約二万歩を歩いていきます。定線巡回といって、コースはほとんど決まっていますが、ともかく、二千歩、三千歩の過不足

はあつても、一晚に二万歩。今年の四月までに五百六十五回の上番をしていますから、二万歩×五百六十五回＝一千三百三十万歩。なんとまあ、ずいぶんと多くの足跡をこの公園に残してきたことになりました。大腿だつたり、足を引きずつたり、つまずいたり、いろんなもので、とても同一人物のものは判定出来ないことでしょう。それでもとにかく、ここまで来ました。通勤に用いる歩数を加えれば、毎回さらに二千歩は増えるでしょう。かの伊能忠敬さんは「四千万歩」というけれど、一千万歩だつて相撲の物差しでいえば十兩クラスと思いたい。取りかかる前は、こんなことも考えず、息子のすずめに乗ったただけでした。月に十日、こうして自己記録を更新しつづけているのですが、相変わらず、決まりきった狭い世界で大いに見聞を広げさせてもらっています。

〔報告〕 一 公園の諸施設は当然、公共のもので、使用前後はカギをかけて管理されています。テニスコートなどその典型でしょう。季節によって閉鎖する時間は違いますが、われわれ巡回警備員が持参のカギで更衣室やコート

出入口を開閉して回ることが常態化しています。この春の夕方、コート外の少しばかりの場所に人が四、五人残っています。よく見れば、なんとベンチのわきにはバイクが二台。ここは乗り入れ禁止ゾーン。しかも、若ものがサッカーに興じているではありませんか。「お前たち、どういっつもりだ！」私は大声が出るのが取り柄と思っ

ています（なにせ、俳優志望ですから）。一瞬ひるんだかのような若ものたち。いずれもこの二、三年ここを根城にして警備員・警察官の手を焼かしている高校生？たちでした。前号でも報告しましたが、なまじ中学生の頃にジャレ合つた関係を持つてしまったためか、「オッサン、いいじゃないか」の気分です。やりたい放題をして行くようになってい

る連中なりました。こちらが真剣に出ればそれでよろこぶだけという反応はわかっていても、もう何回も、いや何十回もこうした接点を持たされている関係ですから、こちらも加速的に荒っぽい対応になります。「とつととバイクを外へ出せ。押しでだ！三分以内」と私。「うるせえな、わかってるよ」と、一人の少年がのそりと動きかけたところで「ち

よつと、あんた、物の言いようがあるだろう」と声がしました。先ほどからベンチで談笑していた七十歳前後のリタイア組ふうテニス（じい）さんたちです。私のどなり声を耳にして介入なさる。「こいつらは、毎晩のようにこうしてきまりを守らない。さいごはごみの山を残していなくなるだけの連中なんです」と私。「それにしても、あんたの口の利き方はない」とテニスさん。「では、あなたやってみてください。一発で伝わるように」と私。おれたちは、ここがバイク禁止だなんて知らないから（二十分に知っているふうだ）。見かねた私の相棒（先輩警備員です）が、「あなたたち、ここはバイク禁止、わかっていますね」とソフトムードをつくり出します。「そうだよ。そう言えばいいんだよ」と若ものたちは大はしやぎです。なるほど、初めてこの場面に遭遇したような人なら、そんなやりとりが常識的なものに見えるでしょう。私のように、いきなりどなるのはどう見ても不快な行為である。私もここは形勢我に利あらずと思

うのですが、いつもさんざんいたずらをしまくって消えて行く準ワルたちを目の前にして、それでは

収まりません。「人間は信頼が持てない関係がつづく相手には、言葉づかいも荒くなるのだ。ワカッタカ」など、せいぜい見栄を切つてその場をそそくさと離れたのでした。背中に、若ものたちの勝ち誇つたような罵声が浴びせかけられます。まったく予期せぬ地域住民のおせっかいのせいで、すつかり柄の悪い警備員の役をさせられてしまったばかりか、まるで敵に塩を送るようなことになってしまいました。私も立場を代えれば、少年野球で小さい選手を相手にどなりつけている監督の言葉を同じように不快なものとして聞いています。問題になる学校教育の場での教師の暴行なども、他人ごととして接すると、「まったく、なんでなの」となるのですが、それを体験させられる破目になりました。もちろん、この場合、私はその監督・教師の立場であり、どなることをする側です。どうでもいい事に首を突つ込むだけのようでも、見逃すことがガマンならんのです。事がさだまった後に、安全地帯からコメントする大人ぶりより、当人になる。程度問題でもあるでしょうが、これにスマホなどの発信ツールがからむと、いくらでも脚

色されてしまう事件になるわけです。炎上事件化こそ、準ワルたちの望む「ヒマつぶし」にふさわしいのですが、この種のことではだいたい、ムキになって怒るほうに正当な理由があつて、しかもそのために、結果、悪者の判定を受ける風潮にあります。それで、警備の世界でも、警備会社が一番弱いのは客先へのクレーム、客先からのクレーム。どんなに見当外れなもので、誤つたものでも、クレームとして持ち込まれること自体、会社にとって一大事という姿勢です（CSの行き着いた果て）。となると、クレーム処理に当つては警備員が必ず負けることが既定の方針。この場合、罵声以上のものは飛んできませんでしたが、こちらが「番犬」として地域の役に立つとうとする行動が「飼い主」からの鞭となつて返つてくる可能性だつてあるのです。そうした体験を重ねる中で、要領よく、必要條件だけ満たした仕事ぶりになっていく。ただ、関田監督。目明き千人盲千人というのか、こちらの熱意を見る人間は客先にもあります。われわれの職場はもうすでに、来春以降の契約延長の打診をされているのですよ。つまり、プラス評

価も与えられている。事情はさまざまであるものの、やはりここは胸を張つておきますわい。
 〈報告 二〉せんたくが好きなのですよ。中身は機械がしてくれれることですが、出したり入れたり、干したり。軍手、靴下、タオル、下着、そして制服、シャツなど、仕事に関わる服装全般を、毎回せつせと洗います。夜間のフクロウ部隊であるのに汚れなど気にしているのかと言わないでください。いつもきれいな身なりでいるのです。坂本龍馬さんは日本のせんたくでしたが、私はあくまで自分の衣服。せんたくは心身のリフレッシュに通じます。そして警備会社も警備員の身なりについてはけっこうやかましい。その会社が、有給休暇制度を導入しました。(いままでは無かった!) 私の職場のように、ひと月三十日の勤務を二人一組で、のべ六十人分を分担する場合、現状でも案外と高度な判断で毎日の当番者を決めていきます。何しろ組み方が片寄つたり、特定人に稼働がまつたりしてはいけませんから。そこへ「働き方改革」の音頭が響いてきました。ですが、いったいどうやって有休を消化できるのでしょうか。毎晩二人で三日

に一度組む。第七人目の要員が来てくれるものでもない。要員数は現在、大変に逼迫しています。なり手は増えずに、全体枠の決まつた中で、ゆとりをつくる。ひと月で六十人分、数字上すつかり割り切れてしまう分配です。民主的分配か、自由な食い合い競争かと、まるで政権選挙のようなことを求められるではありませんか。ただかパートタイマーのシフトづくりとあなどつてはいけません。これは世の中を成り立たせている大きな原理の選択でもあります。平均年齢七十近い集団ですから、現役時代には会社でそういった諸制度を設計した経験者だつている。小さな会社のちっぽけな現場が抱える大問題です。ありがたいやら、困つちやうやらの事態がいま起こりつつあるのですよ。でも、ひよつとして、制度の立ち枯れを想定されているのかも。となると、いずれ「拝啓総理大臣様」となるのでしょうか、こんなふうにしていくと、年をとるのもまた楽しいものです。ね、関田監督。

× × ×

新旧映画あれこれ

森田洋一

●「ピープル・ウィル・トーク」

(1951)

「イヴの総て」「三人の妻への手紙」「裸足の伯爵夫人」がジョセフ・L・マンキーウィッツ三部作といわれています。今回のおすめは、「ピープル・ウィル・トーク」。日本では「うわさの名医」

のタイトルでテレビ放映のみでした。ユーモラスなセリフ、医療とは何かを問いかける、舞台の奥行きを計算しつくす監督だからこそできる作品と思います。ケイリー・グラント主演。ロバート・ミツチャムとオリビア・デ・ハヴィランドの「見知らぬ人でなく」(こちらは若い医師の苦悩が描かれている)とあわせて鑑賞もおもしろいと思います。

●ジェイムズ・キャグニーの日本未公開作

「ヤンキー・ドゥードゥル・ダンデー」(1942)

この年、アカデミー賞主演男優

賞をキャグニーは受賞しています。ギャング映画のイメージが強かったのに対して、本作品ではよく踊っています。内容は、アメリカ万歳のな色彩が濃い感じがします。共演はシヨーン・レスリー、「ヨーク軍曹」では、ゲリー・クーパー

にアカデミー主演男優賞を獲得させている。実在した人物が題材となっている。撮影の裏話も興味深い。ほんの少し出てきた脇役がハンガリーの大物俳優で、キャグニーが二度と共演したくない役者のひとりだったとか。

「鮮血の情報」(1947)

原題13tue madeleine. この意味

がわかるのは、物語が後半に入ってから。スパイものとしては、訓練から裏切り、結末までとてもよく作られていると思います。ヘンリー・ハサウェイ監督。「暁の討伐隊」「ナイアガラ」「ネバダ・ミス」「勇気ある追跡」などけっこう名作を残しています。共演女優のアナベラは、「巴里祭」の女優さん、目立たないような引きの演技が、この作品の奥行きを深めていると感じます。

●ジャン・グレミニオン監督

「ナポレオン」「鉄路の白薔薇」と

いったアベル・ガンス作品を想起させます。そして時代はトッキーへ。ルネ・クレールの「巴里の屋根の下」が初期では有名です。ジャック・フェデー(「女だけの都」「ミモザ館」)、ジュリアン・デュヴィヴィエ(「我等の仲間」「舞踏会の手帳」)、マルセル・カルネ(「北ホテル」「天井桟敷の人々」)、ジャン・ルノワール(「大いなる幻影」「ラ・マルセイーズ」)などの監督さんがフランス映画史には出てきます。そんな中、ジャン・グレミニオン監督は、呪われた

映像作家とよばれ、あまり陽の目をみていないとよく一般的に言われている感じがします。

「この空は君のもの」(1944)

女性飛行士を扱った力作です。「翼よ、あれが巴里の灯だ」の女性的な感じですが、物語の構成、飛行機を扱う迫力、主人公を女性にしたという点からも、かなりよくできた作品だと思います。

「高原の情熱」(1943)

炭鉱にあるホテルを舞台にした、よくありがちなメロドラマです。物語のはじめから少しさびれたような感じの街の雰囲気がよく出ています。

どちらも主演がマドレーヌ・ル

ノー。ジャンルイ・バロー夫人で、数々の作品に出演、「快樂」というマックス・オフルス作品にも出演。「史上最大の作戦」では、クリスチャン・マルカン演じるフランスコマンド部隊を前に、尼僧長として毅然とした役を演じています。

●思いがけず出会ったクラシック映画

「ろくでなし」(1934)

原題を直訳すると「手のつけられない子供」といった感じになるでしょう。ダニエル・ダリュウの魅力が出ています。

内容は、医者の子息が車を盗んで他に売るといった集団の仲間入りをして、展開が進むといった話です。あまり悪い感じの集団ではなく、コミカルな描き方をしている、けっこう笑えました。監督がピリー・ワイルダールですので、おもしろく作られていると思います。音楽も、古きよきシャンソン調な曲も流れ、どこかなつかしさが感じられました。映画やカメラといったところも、映画の基本を学ぶ上で参考になりそうです。短い時間の中に、娯楽の要素をうまくまとめた1本。興味ある方、鑑賞をおすすめします。

●最近のおすすめ
「ハンターキラー」

4月に劇場公開された潜水艦のアクション映画です。はじめのシーンから結末まで何回か予想外の展開がありました。ジェラルド・バトラーが人間味のある艦長役を演じています。定番の魚雷で狙わ

私のお薦め洋画2019①

流 漂介

●「移動都市／モータル・エンジン」(クリスチャン・リヴァーズ)

破天荒なSF。核戦争後の世界か。文明は高度に発達している。小さな町を飲み込んで移動するロンドンの町。顔に傷のある女(ヘラ・ヒルマー)は、骸骨男(サイボーグ)に育てられた。幼少時母親を殺され、支配者に復讐しようとしている。天空に基地をもつ反乱軍に助けられて戦いをもつ反る。飛行機の造形がレトロな雰囲気を出して、見せる。

●「たちあがる女」(ベネディクト・エリクソン)

元気をもらえ、アイスランド映画。ヒロイン(ハルドラ・ゲイルハルズドッテイル)は文明社会

れる、静かに海の底をいく、せまい空間での緊張感、これらは期待通りと思います。プラスして、地上戦のよくある困難なミッションが出てきます。「深く静かに潜航せよ」「眼下の敵」あたりのよい部分の際立ってリメイクされたよ

うな印象も受けました。

へ抗議するために鉄鉱所の送電線を切断したり、運動が理解されない

政府、警察は黙ってはいない——。原題は「WOMAN AT WAR」。彼女にとって活動は戦争というわけだ。テロリストではなくレ

ジスタンスだ。彼女はウクライナの戦災孤児を養子にしようと考えてるなど世界のために役立ちたいの

だ。普段はコーラスを教えている双子の姉、羊飼いらが彼女を支える。脚本も監督。

●「ブラック・クラウンズマン」(ス

パイク・リー) KKKへの潜入捜査。1970年代。黒人ロン(ジョン・デヴィッド・ワシントン)と白人フリッ

「シンブル・フェイバー」直訳すると小さなたのみごと。どういう理由でこのタイトルになったかは物語の前半でわかります

「マイレージ、マイライフ」のアナ・ケンドリックとブレイク・ライブリー(「アデライン、1000

年目の恋」 いったばれるかというハラハラ感。KKKのメンバーの一人(これが

過激で話を盛り上げる)は夫婦そろっての差別主義者。デュークというKKKのボス——彼とは電話

でやりとり——が町にやってくる——。実話。原作はロン・ストーリー

●「ハロウィン」(デヴィッド・

ゴードン・グリーン) 音楽をジョン・カーペンターが担当。カーペンター・サウンドが不安感を醸し出す。ブギーマンと

カフェ・ソサエティ」「ロスト・バケーション」とすばらしい味を出している)の見事なかけ引きが見所と思います。ママ友の関係がミステリーな展開に。最初のシーンとラストシーンをつなぎ合わせる

●「シャザム！」(デヴィッド・F

・サンドバーグ) DCコミックのヒーロー。子供が呪文を唱えると大人の体になってスーパーヒーローとして活躍す

る。当初は子供っぽく力を誇示しているが、徐々にスーパーパワーを発揮して、悪に魂を奪われた義

兄弟(マーク・ストロング)と戦うことになる。

●「オーヴァーロード」(ジュリア

ス・エイヴァリー) 「ガンズ&ゴールド」の監督。戦争アクション。ノルマンディー上陸作戦。輸送機が高射砲により被弾して墜落。5〜6人生き残り、

「パターソン」に見る、 シンプルな人生の豊かさ

堀江広子

ここ数年、筆者が寄稿してきた映画評ならぬ世の中への愚痴や恨み節のような文章に、さすがにぐたびれ、好んで見ているサスペンス映画にもザラザラとした後味しか残らず、頭の中が干からびてきているような思いだった。

そんなとき、普段の自分であれば物足りなくてスルーしてしまうような作品に、ひとときのやすらぎを感じた。それが米映画「パターソン」である。

詩作が好きなバスの運転手

パターソンというアメリカのニ

ュージャージー州の实在する市で、人口は約十五万人ほどの小さな都市。市と同じ名前のパターソンというバスの運転手の一週間を描いた作品だ。彼は詩作を趣味として思いついてはノートに書き留めている。妻と犬（ブルドッグ？）と暮らしている。

書き留めた詩や、出会った女の子が作った詩、永瀬正敏が演じる日本人の詩などは、実際に実在する詩人たちの著作らしい。

パターソンは毎朝6時頃に起きて身支度して出勤する。パターソン市内を走るバスの運転手として仕事を終え帰宅し、郵便を確認し、犬の散歩のついでに行きつけのバーに寄りビールを一杯飲んで再び帰宅。たまにバーのちよつとしたもめ事に首を突っ込んでアドバイスをしたりする。別の日には、10歳くらいの少女と話をしたら少女も詩作すると知り披露してもらい、喜びを感じる繊細な男性だ。サスペンス好きの私などは、このくだりでは、少女の母親に誤解されて誘拐未遂で逮捕されるのではないだろうかと思案を考えたが、全く問題なし。どこまでも平和なのだ。大げさな起承転結がある訳でもなくて、所謂ドラマチ

ックなシーンなど出てこない。いや待て、詩作をする男性が主人公という設定は、充分ドラマチックで異色と言えるかも。飼犬に詩作ノートをポロポロに食い破られてしまい、すっかり落ち込んだ彼が公園で呆然としていると、日本の詩人と出会い会話をする。

気が晴れた彼は、またいつもの日常を取り戻すといった内容だ。これの何が面白いのかと問われても答えようがなく、ずるずると思わせる映画なのだった。

シンプルで豊かな人生がそこに

監督はジム・ジャームツシユという人で脚本も手がける人らしい。筆者はこの監督の作品は全く知らない。六十六歳だから同時代の人だ。一九八九年に『ミステリー・トレイン』という映画に永瀬正敏を起用してから、この映画にも必ず登場させようと考えていたらしい。

永瀬正敏の映画もろくに見た事ない筆者がとやかく言うのは何だけど、詩人というイメージからはほど遠い俳優に見えるのだが、誰をもつてきても合いそうな日本人

俳優はいないように思えるので、ま、いいかである。

穏やかに暮らしている男性の日常を描くこと自体は特別なことではないが、詩作を趣味にしている設定自体、およそ日常的ではないと思うのだ。

彼は携帯電話を持っていない。それは分かる。筆者も三年ほど前まで携帯を持たなかった。必要を感じなかったし、好きではなかったから。

しかし、運転中のバスが故障して会社に連絡するとき、乗客の携帯を借りていた。これは実際に得ないことだ。三十代の働き盛りの男が、しかもアメリカだ。

行きつけのバーでの出来事も、考えると深刻な事態である。店の女性に一方的に思いを寄せてストーカーのようになって知っている知り合いの男が、銃まで持ち出して危うく事件になりそうな場面で、パターソンが未然に防いでいる。そんな簡単にいかないだろう。けれど次にバーに行った時はいつものお店の雰囲気だ。銃を持ち出した男も反省していた。

パターソンの日常は変わることなく続き、あくまでも彼の周りに起こることも全て大事に至らず無

●ごまめ書房の映画の本

昭和映画屋渡世

坊っちゃんプロデューサー奮闘記 斎藤次男・著。『切腹』『男はつらいよ』製作の熱血漢が生み出した、歴史に埋もれた大衆娯楽映画の数々――。現場に飛び散る汗、涙！ 1960年代の映画屋たちの熱気が甦る。映画評論家、書評等絶賛！ 定価 2200 円＋税

おしゃべり映画館

N雄とN子の21世紀マイベストシネマ 門馬徳行、岩館範子・共著。映画対談集。147本をシネマフリークが語りつくす。 定価 2000 円＋税

映画館をはしごして

小泉 敦・著。暗闇の空間での筆者と映画作家の“対決”！ 観たものを言葉でとことん読み解く。 定価 1900 円＋税

人生は映画とともに

今市文明・著。青春時代の映画を語り、ヨーロッパのロケ地を旅し、スターを語る。 定価 1900 円＋税

観る・書く・撮る

シネマフリークここにあり 門馬徳行・著。フツーのおやじのへんに熱っぽい映画評論プラス自作シナリオ集。 定価 2800 円＋税

ばってん映画論

久保嘉之・著。ジェームズ・ボンドと俺が初めて出会うとは、忘れもせんクリクリ坊主の中学2年の秋やったばいー。注目の娯楽映画評論集！ 定価 2000 円＋税

●自費出版のご用命も承っております。安く、丁寧に仕上げます。お気軽にご相談ください。

ごまめ書房

〒270-0107

千葉県流山市西深井 339-2

電話 04-7156-7121

FAX 04-7156-7122

事に終わっているのだ。この映画自体が詩的なのだという人もいた。だが、筆者はそうは思わない。詩作する人間は本当に穏やかな人なのかという疑問が湧いてくる。思い浮かべる日本の詩人のお顔は失礼ながら眼光鋭き方たちが多いように思う。



「パターソン」 アダム・ドライバー

詩作が趣味の人間をマイナーな存在に見せない演出は、なかなか量に感服

監督ジム・ジャームツシュの力

詩人は物事を捉える洞察力が非常に優れた人たちだと思うし、独自の言葉の表現を生み出す努力を研鑽しているから厳しい顔つきにもなるのだろう。つまり、いわゆるメルヘンの世界なんかでは決してない。ふわふわとしたものではなく、現実の社会で全うに生きながら、尚も言葉の力を借りて己を表現し、他者と交流し、そこに喜びと幸せを感じ心豊かに生きている。世間に評価されずとも、スポットライトが当たらなくても黙々と自分らしく生きていく。そんな男の誠実さに観客は静かに共感するので。

妻のサラ役はゴルシフテ・フアラハニというイランの女優さんだ。イラン映画『彼女が消えた浜辺』

量に感服

にして至難の技ではないだろうか。ひとえに、監督ジム・ジャームツシュの脚本の力量のたまものなのかと思う。何しろ作家になりたくてコロンビア大学で英文学を学んだという人である。この人は独特の人間観を持っているのだ、きっと。そして説得力もある。人間の真心を信じているというのかな。物事を素直に見られないひねくれ者の筆者は、少々恥ずかしい思いも抱いた。主人公役は、今とても注目されているというアダム・ドライバー。彼の演技は見事だ。どんな役柄も器用にこなしてしまう俳優と聞く。作品に対する監督の思いを、深く理解しているように見えた。

今回の妻役は自然で、それぞれが役を難なくこなしている。映画の中にスッと入ることができたのも俳優の実力があってのことなのだろう。

ジム・ジャームツシュ監督の他の作品も機会があれば観てみたいと思う。

の主演を務めた。この映画は秀逸だった。だが残念なことに、浜辺に消えた女性役の女優さんに気をとられて、ゴルシフテ・フアラハニをあまり覚えていなかった。余談だが、作品自体は秀逸で、正直イラン映画のレベルの高さに非常に驚いたのを覚えている。イランに関しては戦争のイメージが強く、人々の日常生活を想像出来にくかったから。

特集

私の映画タイム

少林寺拳法シニア流山健康クラブ

認知症と2本の映画
石井宏明

私は今年の秋に満80歳を迎える。現在私の最大の関心事は認知症である。

認知症に関する本、新聞雑誌の記事、テレビ、ラジオの特集番組その他講演など認知症という言葉に触れると即座に反応する。

かつて認知症は老人性痴呆症或いはボケと呼ばれていた時代があった。あまりにも語感が悪く、他

人にも自分にも使うのが憚られた。ところが誰が発明したのか、認知症というスマートな名称になって文字通り社会に認知され、一般化した。

先日、ある認知症担当医の講演を聴く機会を得たが、2012年のデータでは、2025年には65歳以上の認知症患者は700万人以上に達し、5人に1人が認知症になるといふ。

中でも最も多いのがアルツハイマー型認知症で全体の70%を占めるそうで、その初期症状は以前に比べて学習、記憶、遂行機能が低下することだといふ。

政府も高齢者の運転ミスによる事故が多発している現状に手を拱いては行かれず、今年から共生と予防の取り組みを強化し、70代の認知症の割合を2025年までに6%減らすという大綱を発表した。その症状の多くは、程度に応じて物忘れ、失語、徘徊、感情の爆発、失禁などである。

私も徘徊以下の症状にはまださつておらず、辛うじて踏み止まっただけだが、最近電気を点けっぱなしで外出したり、家に帰ると玄関の鍵がかかっていたり、知人と会っても別れるまで相手の

名前が思い出せなかったり、簡単な漢字が書けなかったり、認知症の初期症状は枚挙にいとまがない。前記の講演によればその予防には極力外出しておしゃべり、将棋や麻雀などのゲーム、音楽や絵画の芸術に触れる、新しいことにチャレンジする、またジョギングやウォーキングなどの有酸素運動、スクワットなどの筋トレを日常的に行うことが有効とされているが、未だに特效薬はないそうである。そんな現状の中で今年私は認知症をテーマにした二本の映画を観た。

一つは信友直子監督の「ぼけますから、よろしくお願いします。」で監督自らカメラを回して両親の生活を撮った勇気あるドキュメンタリー映画である。父98歳、母89歳の正に超・老老介護の二人の日常を娘の視点から時に愛情に満ち、時に客観的なカメラワークで描いている。

母は85歳でアルツハイマー型認知症を発症する。

彼女は発症前には家事全般を一手にこなし、趣味の書道では、四大書法展の一つ、読売書法展のかな部門で特選を得たほどの腕前、父は家庭の事情で京都大学での言

語学専攻の夢を諦めたが語学への思い已み難く、現在もラジオ講座でドイツ語、スペイン語、イタリア語と語学漬けの日々を送っている。妻の発症後は全く家事をやったことのない夫が90代で掃除、洗濯、買い物、料理、ゴミ出し、遂には繕い物まで妻の代わりにやり始める。

私はこの古武士然とした風貌で、自己への厳しさと共に妻を思い遣る夫のかけこ良さに脱帽し、共感と感動を禁じ得なかった。

この映画を観て出演した夫と妻、母と娘そして父と娘の強い絆を実感した。

もう一つの映画は中野量太監督の新作で、原作は直木賞作家中島京子の実体験に基づく作品で、この6月に公開された「長いお別れ」である。アメリカでは認知症のことを「ロング・グッドバイ」と呼ぶことがあるそうで、映画のタイトルもここから生れた。認知症でゆっくりと記憶を失っていく父と向き合う家族の姿を、2007年から7年間で4つのパートに分けて丹念に綴っていく内容で、父を山崎努、妻を松原智恵子、長女を竹内結子、次女を蒼井優が演じている。

「少林寺拳法シニア流山健康クラブ」は、一般財団法人少林寺拳法連盟の管轄下にあり、少林寺拳法の技法のエッセンスを取り入れた手軽な運動により、健康増進を目的として活動しています。流山市立常盤松中学校・武道場で週2回（火曜・木曜、夜7時から1時間半）、流山市コミュニティプラザで週1回（金曜、朝10時から1時間半）練習しています。

元中学校の校長までつとめた厳格で頑固だがどことなくユーモアがある主人公の老人を山崎努が実に巧みに演じている。「天国と地獄」以来注目していた俳優だが「モリのいる場所」やこの作品で新しい境地を開いた感がある。長女は夫の転勤でアメリカ暮らし、次女は栄養士として食堂で働いているが、認知症の父の存在は片時も2人の脳裏から離れない。妻は記憶を失いつつある夫を温かく大らかに見守る。何とも微笑ましい家族である。父が同級生の葬式に次女の付き添いで参列し、その同級生がその場にはないと騒ぐ場面は圧巻である。

この映画のエンドロールに流れる原田美枝子の娘でシンガーソングライターの優河の歌う「めぐる」もこの映画に相応しいしつとりとした名曲であった。

認知症を主題とした2本の映画を観て共通して感じたのはやはり夫婦の絆と家族の愛情である。しかしこれは一朝一夕に築かれるものではない。認知症患者が発症まで生きてきた人生に深く関わっている。長い人生で自分が配偶者や

家族に与えてきたものへのお返しの部分もある。だがこの2本の映画の主人公は配偶者や家族に恵まれて幸せな環境にあったとも言えよう。世間には私のような独居

老人もいるし、家族に恵まれない人も少なくはない。私にも2人の子どもがいるが認知症になってもたちに迷惑はかけたくないと常に思っている。だが認知症にならないという保証は誰にもない。認知症になればどんな環境にありうとも赤子に帰って世間一般の荒波にもまれることなく我関せず心静かで幸せではないか、と言う人もいるが私はそうは思わない。可能、不可能は別として最期の最期まで自分の意志で行動できる自分でありたいと願っている。そのためには自分自身で予防するしか法はない。私にとって無理をしないで楽しく続けられる予防法は、映画館に通いながら常に新しい刺激を得ること、そして少林寺拳法シニア流山健康クラブで仲間と共に体を動かしおしゃべりをする、それが私にとっての最良の認知症予防法であると信じている。完

映画とその周辺

土田博志

私達の日常は、音に囲まれていません。

その中で、音楽は生活に情趣と豊かさを与えてくれます。

自分自身も、様々なジャンルの音楽を聴くのは好きですが、カラオケで歌うことは苦痛で他人に不快感を増幅させるのでまるでダメです。

原因は、音痴です。

それでも、気分が落ち込み、やる気がない時などに聴くと、体の中からふつふつと高揚感が沸き上がる。唯今定番の4曲があります。

ベートーベンの交響曲第5番「運命」、美空ひばりの「川の流れるように」、ウルフルズの「ガッツだぜ!!」、最後にボクシング映画「ロッキーマン」のテーマ曲等です。

「ロッキーマン」は、1977年4月に日本で公開され、その後シリーズ化されています。

曲は、シーンとマッチして効果

的に使われトランペットから音が飛び出し強烈に躍動し聴く度に、何か心を奮い立たせ身体がシャキッとして、急な階段、坂道も難無くさくさくと登れます。

つくばエクスプレス線の、秋葉原地下駅からJRの改札口までの階段は手強く、ミュージックプレーヤーを聴きながら、ロッキーマンになった気分が階段を上がっていきながらも機会が有りましたら、主人公ロッキーマンのイメージで階段のぼりに挑んでみては。

たぶん、はやりのアップルウォッチを付けなくても、十分に対抗出来、気分一新です。

2009年1月15日、チエズレイ・サレンバーガー機長他154名が乗る、USエアウェイズ、エアバスA320が離陸後トリガジェットエンジンに吸い込まれバードストライクが発生し推進力を喪失し、飛行困難となりニューヨーク市マンハッタン付近のハドソン川に不時着し、乗客乗務員が救出された航空機事故を題材の「ハドソン川の奇跡」です。

2016年9月に、日本でも公開され主演トム・ハンクス。監督

はクリント・イーストウッドで俳優としても数多くの作品に出演し「ダーティハリー」シリーズは何本か作られ、悪を徹底的に懲らしめる姿やアクションは見ていておもしろく泣けてきます。

「ハドソン川の奇跡」では、いかに確実に生還させるか短時間の間に、機長の判断と行動、操縦技術力が試されます。

何事も無く、当り前に運行されるベストな状況から、不意な出来事で一瞬にして緊張が走り緊迫感に包まれます。

事故後は、調査委員会で謂れなき非難、追求、葛藤などが描かれ深く考えさせられた作品です。

Y宅配便の2トントラックは停車時に、タイヤの向きを左側に向けていたり、あるいは車止めをしています。

何故か、追突された場合でも前進する事なく縁石に当って止まり、坂道も前に進む事は無く、二次災害を未然に防ぐ対策になっています。

ほんの少しの行為が、日々の安全を守っていると思うと感心します。

報道で、パイロットがアルコールチェックで基準値を超えた値が

出て、乗務停止や欠航になった事例が有り、命を預ける身としては不安で、映画のような事故もあるので姿勢を正し使命を忘れないでと思いました。

最後に、年々歳を重ねています。が以前より外出する機会が減っています。

年を取ったら、「きょうよう」と「きょういく」が必要と書かれたコラムがあり、「きょうよう」は今日の用事、「きょういく」は今日行くところだそうです。

今後は、「きょういく」を大切にしましては映画館に行き、刺激、感動、興奮、笑い等を楽しみたい。そして、令和はどのような映画が生まれ、AIの進歩がどうなるか、どんな時代になるのか楽しみます。今年には外出を増やし、映画で新たな発見を。

『Shall we ダンス?』

大築 猛

この映画は1996年1月に公開されました。前評判も高く、出演する俳優が個性派揃いで、私の好きな俳優も多く出演しており、

公開を楽しみに待っていたことを懐かしく思い出します。この作品の監督は周防正行で、監督前作の『シコふんじやった。』の竹中直人、柄本明、本木雅弘が引き続きこの作品にでており、そして今回の主人公、役所広司、元プリマ・バレリーナ草刈民代に、さらに、渡辺えり子、原日出子、草村礼子、徳井優、田口浩正など豪華な脇役の好演が一層ストーリーを引き立て、何回観ても、飽きない笑いあり、涙あり、心温まる不朽の作品になっています。さらに大ヒットしたこのダンス映画は、2005年にリチャード・ギア主演の『Shall we Dance?』がハリウッドでリメイク上映されました。また、周防正行監督が公開直後の3月に出演者の草刈民代と結婚したことは電撃的なことでした。

さて、本題に入ります。オープニングは、デボラ・カー、ユル・プリンナー出演の映画『王様と私』で流れた♪シャル・ウィ・ダンス?♪をバックに有名なイギリスのブラックプールのボール・ルームで十数組の男女が楽しそうにダンスしている風景が映し出されます。そしてナレーションで、私の記憶が正しければ、スコットランドの

政治経済学者のアダム・スコットの『舞踊と音楽は人間自身の発明した最初にして最も初期的な快楽である』の言葉を紹介しています。四十代前半の主人公杉山正平(役所広司)は会社の経理課長。

昇進は順調、最近、念願だった庭付きのマイホームを購入。美しい優しい妻昌子(原日出子)とちょっぴり生意気だが可愛い中学生の一人娘がいて夫婦仲は良好。家庭にも会社にも何の不満もなかったが、どこか平凡な生活に少し物足りなさを感じていた彼が、ある晩たまたま通勤電車の車窓から見た2階にあるダンス教室の窓に、物憂げに遠くを見つめて佇む神秘的な女性、岸川舞(草刈民代)を見つけ、その美しい姿に目を奪われた彼は、次第に惹かれていきます。数日後、ためらいながらも勇気をもってダンス教室に行き、家族に内緒で社交ダンスを習い始めることにしました。あの美しい女性が受付をしていました。終始、愛想のない極めて事務的な説明をします。「個人レッスン」の料金があまりにも高いのに驚いて躊躇している杉山に、近くにいたベテランのたま子講師(草村礼子)から面白い「3人のグループレッスン枠、

特集 私の映画タイム

一人残っている」と知らされ、水曜日に1回だけ入会することにしました。ここで、美しい舞について紹介しておきます。彼女はダンス一家で育ち、幼少の頃からダンス一筋に成長し、イギリスのブラックプールで行われる世界的なダンス大会で好成績を残せるほどの実力の持ち主ですが、現在、とある理由で傷心の身で、父よりこの教室のダンス講師をさせられていますが、いやいや仕方なくやっています。しかし、美人ゆえ、男性の多くは、この美人目当てで入会しています。杉山も例外ではありませんでした。指導はベテランのたま子講師から受けることとなり当てが外れたものの、「グループレッスン」仲間の講釈の多いチビ男服部（徳井優）とデブの汗かき男田中（田口浩正）、そして偶然にも5年前から同じダンス教室を利用していた会社の同僚青木富夫（竹中直人）やプライドが高く、有閑マダム的な振る舞いをするダンス教室の唯一の女性生徒の高橋豊子（渡辺えり子）といった個性的な仲間との交流を通じて、次第にダンスにのめり込んでいき

ます。ある日、会社の女性社員が青木がダンスをしている写真記事を見つけ、経理課内の話題になり、「あのハゲがダンスなんかやってる！」と嘲笑していると、突然、杉山が立ち上がって「社交ダンスのどこがいけない」「踊ったことのない人間が、失礼なことを言うんじゃない」と叱りつけるシーンは感動的であった。ダンスがどんな楽しくなっていく杉山は、会社でも机の下でステップを、電車を待つ間も、ホームで無意識のうちにステップを踏んでいました。さらに、帰宅途中の自宅近くの河川敷では背中に矯正器具を付けて練習までになっていきます。

舞に惹かれていた杉山は、グループ・レッスンの時でも自然と舞に釘付けになっています。ある水曜日の夜、帰宅時間を遅らせ、杉山は駅で舞を待ち受けます。「食事をとっていないので、食事でも一緒にどうかと思ひまして」と声を掛けます。しかし、舞は、杉山の心を見透かしていたのです。「生徒さんと外で会うことはしたくありません。私は真剣にダンスと向き合っています。不純な動機でダンスはしてほしくないんです」。このことがあってから、最初は心を閉ざしていた舞であったが、杉山のダンスへのひたむきな姿を見るうちに、だんだんと心を開いていきます。

社内ではバツとしないがダンスになると情熱的になる会社の同僚の青木が、素人同然の杉山に色々アドバイスしてくれたりダンスパーティーに誘ってくれたりします。そして、数週が経ちます。個人のダンスパーティーに参加しようと声を掛けたのは服部でした。杉山は、水曜だけでなく、土・日曜日も出かける機会が増えていきます。一方、急に夫の帰宅が遅くなったこと、ワイシャツには香水の匂いも着ていることを心配した杉山の妻昌子は、悩み戸惑いながらも、探偵事務所を訪ねます。所長の三輪（柄本明）に夫の浮気調査を依頼します。結果は簡単にわかりました。水曜日のダンス教室と、土・日曜日も社交ダンスのパーティーに参加していました。三輪はそのことを昌子に報告します。昌子の心情は複雑でした。「ダンスなら最初から教えてくれれば良かったのに」と……。

たま子講師の提案で、杉山は豊子とペアを組んでアマチュアスポーツダンス大会に出場することになり、週3日のレッスンが始まります。何度かレッスンが進むうちに、舞に声を掛けます。「舞さんも、二人を見てくれないかしら?」。舞は承諾し、特訓が始まります。さらに、青木も服部も田中もこの地区大会に出場することになりました。

観衆の前で特訓の成果を披露することになった杉山・豊子ペア。しかし、踊っている最中、探偵所長の三輪の提案で会場に来ていた妻と娘の姿を見つけた杉山は、動揺のあまり動きが止まり、直後に他のダンサーと衝突、転倒しかけたため身を挺して豊子を守ります。しかしその際、杉山が豊子の衣装を踏んだためスカートがはだけてしまい、周囲は静寂に包まれました。明らかに減点となり合格しないことを悟った豊子は茫然自失となりレオタード姿のままその場から立ち去ろうとしたが、杉山は豊子のことを無意識に気にかけて、落ちて破れたスカートで豊子の下半

身を隠すように勧めた。その姿を見た妻と娘も会場から立ち去りません。

その夜、妻から「浮気かと思っちゃった」と浮気調査をしていたことを詫びられ、かなり前からダンスをやっていることに気づいていたものの、怖くて告げられなかったと伝えられる。杉山は「ダンスは浮気じゃなかった。本気だった。」と言いい、でも、「もうダンスはやらない」ことを告げます。それ以降、ダンス教室にも行かなくなっていたが、しばらくしてから、杉山の家に青木と豊子が訪ねて来て、豊子は「杉山さん、あたし怒ってなんかいないから。戻ってきよよ！」。そして、舞が教室の講師を辞め、海外で再び社交ダンスをする決意したことを告げ、舞からの手紙を渡す。さらに、舞のサヨナラ・パーティーに来るよう、またダンスを続けるように勧められる。杉山は拒否するが、娘に「ダンスを踊るパパ、カッコよかったよ」と言われ、娘に「ママと踊ってよ！」と勧められ、強引に手を引く張られて庭に出て、初めて妻とダンスをします。そして「淋しい思いをさせて悪かった」と妻に声を掛けます。ここで胸キュン！

です。夫婦の絆、そして親子の大切さを知ります。そして、妻から、ダンスを続けることと、舞のサヨナラ・パーティーに行くように言われたが、それでも杉山はサヨナラ・パーティーには行かないつもりで、退社後、パチンコ店で時間を潰した後、帰宅しようとするが、電車の中から社交ダンス教室を見上げると窓に「Shall we ダンス？」 杉山さん」というメッセージが貼られているのを発見します。

その頃、会場となったダンスホールへの受付に座っていたのは、青木と豊子でした。もう、あきらめ顔です。そして、「舞さんのサヨナラ・パーティーも、残すところあと一曲になりました。最後の曲のパートナーは、舞さん自身に決めていただきます」と司会者が告げます。

ライトが会場を流れていきます。1周、2周とスポットライトが回ります。しかし、そこには杉山の姿はありません。あきらめかけたその瞬間、入ってきたのは杉山でした。スポットライトが杉山に当たります。舞はゆっくりと杉山に向かって足を進めます。そして、「Shall we ダンス？」と差

し伸べる舞の手をとった杉山は、みんなが見守る中で、最高のダンスを踊ります。しばらくして、青木、豊子、服部、田中たちもそれぞれダンスに入っていきます。そして、映画のラスト・シーンはオープニングのブラックプールのボール・ルームで十数組の男女が楽しそうにダンスしている風景が再び現れ、ラストソング♪Save The Last Dance For Me♪が流れます。

思い出の映画

杉山 隆

娯楽の少なかつた中学時代は、西部劇が超人気であった。ゲリー・キューパー、タイロン・パワー、ジョン・ウェイン、ヴィクター・マチュア、カーク・ダグラス等、西部劇には満足していた。またジョン・ワイズミュラーの「ターザン」などは小学校からクラス挙げて観に出かけた。映画のクライマックス！ターザンが「アーア」と動物たちに呼びかけると、動物たちが悪者に襲いかかる。映画館の中でわれわれは興奮して立ち上がり喜び叫んだものだ。「ターザ

ン？」知る人も少なくなっている、懐かしい時代だ！

今も記憶に残る西部劇

■「駅馬車」(1939) ジョン・ウェイン主演・ニューメキシコに向かう駅馬車に乗り合わせた男女の人間模様を中心にアパッチ族との闘いや、息詰まる決闘を描く。J・フォードとJ・ウェインの最強タッグが贈る西部劇史上の最高傑作。

■「西部の男」(1940) ゲリー・キューパー主演・1880年代のテキサス。流れ者は開拓農民と牧場主とのめ事を仲裁しようとするが……。G・キューパー、W・ブレナンの渋い演技が光った西部劇。G・キューパーの長い足が馬の腹を抱えるようなのが印象的だ。

■「地獄への道」(1939) タイロン・パワー主演・ジェシーとフランクのジェームズ兄弟が鉄道会社の横暴によって、ごく平凡な青年から伝説的なならず者へと変貌していく姿を追った傑作。T・パワーとH・フォondaが兄弟を熱演。これなどは日本で語られる「義賊」の伝記映画に並ぶ傑作でなかるうか。

西部劇にはこと欠かなかったが、

心の中に強く残るのは、いまは亡き三船敏郎と黒澤明コンビの数々の映画だ。

最高傑作「七人の侍」

三船敏郎を初めて知ったのは、中学時代だ。「銀嶺の果て」(1947。監督Ⅱ谷口千吉。黒澤明との共同脚本)だと思ふ。「生きものの記録」(1955)もある。そのほかにも三船敏郎と黒澤明監督の傑作は多い。中でも「七人の侍」(1954)は当時の通常作品の7倍ほどに匹敵する製作費をかけ、多くのスタッフ・キャストを動員し、1年余の期間をかけて制作されたという。興行的には大成功し、700万人の観客動員を記録したとも聞いている。

日本の戦国時代を舞台とした、野武士の略奪により困窮した百姓に雇われる形で集った7人の侍が、身分差による軋轢を乗り越えながら協力して野武士の一団と戦う物語。

黒澤明が初めてマルチカム方式(複数のカメラで同時に撮影する方式)を採用し、望遠レンズを多用したという。ダイナミックな編

集を駆使して、豪雨の決戦シーン等の迫力あるアクションシーンを生み出した。さらにその技術と共に、綿密な時代考証等により、アクション映画・時代劇におけるリアリズム(現実主義)を確立した。

このシーンの中で、野武士と百姓との最後の戦いの中の雨は、真水だとモノクロの時代であり迫力はなく、真水の中に墨汁を入れて黒い雨と化し、さらにそのシーンを迫力あるものにしたのは有名な話である。「七人の侍」「蜘蛛巣城」「隠し砦の三悪人」「用心棒」「椿三十郎」など面白いシーンを演出している。

幾つものカメラを駆使し戦闘シーンでもどこを撮影しているかわからないから、当事者も真剣に戦闘をしなければならなかった。

黒澤明が尊敬するジョン・フォードの西部劇から影響を受け、この作品自体も世界の映画人・映画作品に多大な影響を与えた。1960年にはアメリカ合衆国で「荒野の七人」として、2016年には「マグニフィセント・セブン」としてリメイクされている。ヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞受賞

(Wikipedia)。

印象に残る「蜘蛛巣城」

「蜘蛛巣城」(1957)は、シエイクスピアの「マクベス」を戦国時代に置き換えた作品である。制作日数・製作費共に破格のスケールで作られた。物語の舞台である蜘蛛巣城のセットは、富士山の2合目・太郎坊の火山灰地に建設された。足場の悪い火山灰地での建設のため、近くに駐屯していた進駐軍にも手伝ってもらい、ブルドーザーで火山灰を掘って土台を建てた。このセットは、晴れた日には麓の御殿場市の街から見えたほどの巨大なものになったという。門の内側は砦(世田谷区の砦)の東宝撮影所近くの農場にオープンセットを組み、室内も東京のスタジオで撮影されている。

物語は、謀反を鎮圧した武時(三船敏郎)と義明(千秋実)は慣れているはずの蜘蛛手の森で道に迷い、奇妙な老婆に合う。老婆は、武時はやがて北の館の主、そして蜘蛛巣城の城主になることを告げ、義明は一の砦の大将となり、やがて子が蜘蛛巣城の城主になる

ことを告げる。二人は一笑に付すが、主君が与えた褒賞は、武時を北の館の主、義明を一の砦の大将に任ずるものであった。武時から一部始終を聞いた妻・浅茅は、老婆の予言を国春(主君)が知れば、こちらが危ないと、謀反をそそのかす。武時の心は揺れ動く。折しも、国春が、藤巻の謀反の黒幕、隣国の乾を討つために北の館へやって来る。その夜、浅茅は見張りの兵士たちを痺れ薬入りの酒で眠らせ、武時は、眠っている国春を殺す。主君殺しの濡れ衣をかかれた臣下・小田倉則安は国春の嫡男・国丸を擁し、蜘蛛巣城に至るが、蜘蛛巣城の留守をあずかっていた義明は開門せず、弓矢で攻撃してきたため、2人は逃亡する。

義明の強い推挙もあって、蜘蛛巣城の城主となった武時だったが、子がないために義明の嫡男・義照を養子に迎えようとする。だが浅茅はこれを拒み、加えて懐妊を告げたため、武時の心は又しても変わる。義明親子が姿を見せないまま養子縁組の宴が始まるが、その中で武時は、死装束に身を包んだ

義明の幻を見て、抜刀して錯乱する。浅茅が客を引き上げさせると、ひとりの武者が、義明は殺害したものの、義照は取り逃がしたと報告する。

嵐の夜、浅茅は死産し、国丸、則安、義照を擁した乾の軍勢が攻め込んできたという報が入る。無策の家臣たちに苛立った武時は、轟く雷鳴を聞いて森の老婆のことを思い出し、一人蜘蛛手の森へ馬を走らせる。現れた老婆は「蜘蛛手の森が城に寄せて来ぬ限り、お前様は戦に敗れることはない」と予言する。蜘蛛巣城を包囲され動揺する将兵に、武時は老婆の予言を語って聞かせ、士気を高めるが、野鳥の群れが城に飛び込むなど不穏な夜が明けた翌日、浅茅は発狂し、手を「血が取れぬ」と洗い続ける。そして寄せてくる蜘蛛手の森に恐慌をきたす兵士たち。持ち場に戻れと怒鳴る武時めがけて、味方達の中から無数の矢が放たれる。数十本の「矢」を全身に受けた武時は悲惨な最期を遂げる。

国内外から尊敬される大スター

いずれの映画にも三船敏郎の姿は思い切り演技に打ち込んでいるのが伺える、動作とその表情であ

る。ある時は全身で喜び、また怒りを表し、悲しみを表す、その演技は見る物をして演技とは思えないその動作に感銘させられる。世界の三船というレベルで語られる日本人唯一の俳優、三船敏郎。国内はもとより世界の映画人たちからも愛され尊敬されているスター。俳優としてのイメージは「寡黙（口数が少ない、無駄口が少なく）、豪快、武骨?（礼儀作法をわきまえていない）」と言った言葉で語る人もいるが、これも演技の表れがそのまま出るのではないでしょうか。

三船のノートには細かくぎつしりと丁寧な字で演技プランが書き込まれていたと言われる。国際映画人として世界中の映画関係者に影響を与えた三船敏郎を映画好きな人として、今一度見直してみようではないか?

Outsiderの映画事情2

門屋大一一

少林寺拳法シニア流山健康クラブで、暫く映画を観ないと禁断症状を呈する程の movie-goer は石井

先生と関田さん。今年すでに映画を観た回数が百回を超え年内に二百回になる可能性もあるとのこと。クラブメンバーも只々驚くばかり。映画はこれ程までに人を引き付ける力を持っていると言うことか。拳法練習開始前、映画に関しツ

ーカーのご両人は嬉々として「情報」を交換するのが常。話題は現在注目の映画・脚本・俳優・監督から始まりそれぞれの記憶に残る「名画」にまで及ぶ。映画 *outsider* である私にとつてここは貴重な映画情報源であると同時に、幅広い話の聞ける楽しみの場。関田さんのご厚意で今年もまた映画を通じて我が映画事情を振り返る機会を与えられたことを何より有り難く思います。日常「映画を観る回数」が決定的に少ないものにシネマ気球に寄稿が許されるのか。何時もの自問を繰り返しつつ、「武蔵—むさし—」「アラジン」・「エア・フォース・ワン」に (*Outsider* などの視点で以下に。

○「武蔵—むさし—」(映画)

「武蔵—むさし—」は「実際に重視した殺陣に独特の工夫をこらしており史実を追求した作品である」と紹介してくれたのは健康ク

ラブで練習を開始され杖術他多面でも幅広い *Jack Broth* の豊かな梅木さん。早速「吉川英治 宮本武蔵」に魅せられた若かりし日々を懐かしく思い起こして、久しぶりのワクワク感を胸に劇場に足を運んだ次第。

三上康雄監督は登場人物を極力限定し、可能な限り史実に忠実に斬新な「三上 武蔵」像を描く。

多くの達人・宗家として世に認められた武術家と敵対し撃破して突き進む野獣の様な武蔵が沢庵和尚に見守られながら自己と相剋しつつ人間として成長する姿を追う。

一連の吉岡家との戦いが主文脈であろうか。吉岡清十郎・伝七郎兄弟を打ち碎かれ吉岡一門は怨念に燃え一乗寺下り松で武蔵との決闘に至る。武蔵は数十人を相手に単身捨て身で敵地に切り込むと言う絶対絶命の危機を、「狂気」を丸出しにして必死に戦って生き延びる。様々な工夫を極め写実をひたすら追求した殺陣は、観る者を圧倒し続ける。武蔵の成長を物語る挿話も数少なく限定し鎖鎌の穴戸梅軒、十字槍の道楽、佐々木小次郎との巖流島の決闘をも併せて「三上むさし」で表現されるのは読ませる *fiction* 「吉川武蔵」と

は別物の感。激しく生身と生身が切り結ぶ修羅場の剣戟場面は、演技・映像・音響全て迫力に溢れている。真剣同様の模擬刀まで準備して撮影に臨んだとのこと。目利きの時代劇映画ファンをも唸らせる「こだわり」の数々も見所らしい。ついに、細川家の剣術指南となった小次郎と雌雄を決することとなる。佐々木小次郎を演じる松平健・沢村大学を演じた目黒祐樹・その他にも若林豪などoutsiderでも識別できる豪華俳優陣を配置し、武蔵役に抜擢され十分に応えたのは若手細田善彦。将来が囑望される。

吉川英治ワールドに没頭し中でも「宮本武蔵」を無我夢中で何回も読み耽ったのは我が中高生時代。ここではページ毎に散りばめられた意味深い挿話が武蔵の人間の成長と絡んで点から線になりダイナミックに展開する筋書きに魅了された記憶は今尚懐かしい。お通の笛「銀龍」の音色を「唳々と、涼々と、咽ぶ限りを咽んで……」。この佳人の横笛に五情に脆い人間の子が感動しないでおれようか。「とした吉川流の表現に一々共

鳴し決定的場面で何処からともなく聞こえて来るお通の笛の音に幾度若き胸を躍らせたものか。武蔵を慕って行く先々を見え隠れしながらお通と城太郎が追う。武蔵の

武人としての悩みの極致で絶妙のタイミングで現れて武蔵を厳しく導く沢庵和尚。脇を佐々木小次郎・お杉婆・又八・朱美・お甲など個性的人物が固める。命を掛けた数々の勝負に直面する過程で、柳生石舟斎の芍薬の切り口から道を究めることの神髄を学び吉野太夫に琵琶の横木が音色に及ぼす深遠な意味を教わり清十郎を倒し蓮華王院三十三間堂で伝七郎を一刀で砕く戦いの進展と共に……銃や弓も待ち構える一乗寺下り松は満山満地が皆敵で必死で活路求めるうち無意識の二刀流が開眼する。未だ幼い敵将源次郎を討ち果たした故の苦悶の武蔵が滝修行に没頭する。木曾路で夢想流杖術の始祖夢想権之助との対決も一つの山場……。剣の道を必死に追求する武蔵の向かう先は佐々木小次郎との決戦の場船島。史実が何処に有るか不学で不明のまま、この様な「吉川武蔵」のstoryも併せて思い

起こしながら「三上むさし」を楽しんだ次第。史実も辿りつつ歴史ロマン映画にも痺れてみるか。

○「アラジン」(テレビ)

砂漠の王国アグラババーに暮らす、青年アラジンが巡り合ったのは、王宮の外の世界での自由を求める王女ジャスミンと、「3つの願い」を叶えることができる「ランプの魔人」ジーニー。アラジンがジーニーに求めた3つの願いは、「①王子になりたい②窮地の命乞い(海底から助かりたい)③ジーニーを自由にしたい」。アグラババーの狡猾な国務大臣ジャファーも手練手管を弄して3つの願い事を追求する。「①アグラババーの支配者になる②自分を世界一の魔法使いにする③自分を真の世界最強の存在にする」。魔法のランプの争奪戦は願ひ事を実現する権利の争奪戦でありそれぞれの「願い」を求めてランプの争奪戦が錯綜しながら、本物語の正文脈として展開する。魔法の絨毯で夜空を駆けながら、アラジンとジャスミンは次第に心を通わせ合う。アラジンはジャファーとの戦いを終えてアグラババー

の平和を取り戻した後、最後の願いでジーニーをランプから解放して自由の身にする。自由になったジーニーはアラジンと別れて旅立ち、アラジンとジャスミンは結ばれる。主題歌「ホール・ニュー・ワールド」は「見せてあげよう輝く世界 眼を開いて この広い世界を魔法の絨毯に身を任せ……」と歌い、この物語を総括する主題歌で心地よい歌詞とメロディは世界中を夢見心地にしたと言われ

Disney映画の人気の秘策ここに有りとも思わせる。ピアノ楽譜を入力してレパートリーの一つにして長く楽しみたいもの。後期高齢者入りした身をも顧みず若返って世界を沸かせた極上のFantasyを自己流に暫し楽しんだ次第。Anti-ragingにも観面の効果あり。

○「エア・フォース・ワン」(DVD)

米露の合同特殊部隊は、カザフスタンの独裁者ラデク將軍を捕え、一連の政治的動きの中で米大統領マーシャルはモスクワで「米国は反テロ」を宣言して、帰途大統領専用機エア・フォース・ワンはモスクワからワシントンに向けロシ

アの取材テレビクルーも搭乗して飛び立つ。ドイツ上空を飛行中にテレビクルーに扮していたロシアのテロリストは綿密な計画通りエア・フォース・ワンをハイジャックする。テロリストは米国にラデク將軍の釈放を求め、機内の人質を時間刻みで殺すと脅迫し続ける。エア・フォース・ワンに搭乗している大統領・人質とテロリストとたちが対峙して逼迫したドラマが展開する。エア・フォース・ワンは外部からの攻撃に対する各種防御装置を装備しており対空ミサイル攻撃に対する防御手段として、ミサイル警報装置や赤外線誘導ミサイルの誘導を妨害する赤外線対抗手段、リーダーを妨害するチャフなど最新装備を駆使して敵機からの攻撃をかわす。テロリストと地上の米政府とのギリギリの交渉は圧巻。主が不在のホワイトハウス司令室では、副大統領キャサリン・ベネットの指揮下、ディーン国防長官ら政府首脳による緊急会議が続く。ラデクがカザフスタンに戻れば、ペトロフ政権は崩壊し、そして恐るべき核テロリスト国家の照準は米国に向けられることになる。機内で孤軍奮闘のマーシャルは何とかホワイトハウスとの電

話連絡に成功し、彼の生存を確認したホワイトハウスは俄かに活気づく。機内での争いの結果エア・フォース・ワンは損傷が大きく墜落の危機に陥る。大統領マーシャルは、墜落寸前のエア・フォース・ワンから危機一髪ロープを伝って救援機に脱出する。大統領搭乗機がエア・フォース・ワン。従って大統領が救援機に移った時「今から救援機がエア・フォース・ワン」と叫ばれる。孫が急遽持ち込んだ「Air Force One」で久しぶりで味わったスリルとサスペンスの世界。昔練り返した成田⇄JFK間の14時間フライト中スリルとサスペンスを満載したForstythの著作を手当たり次第に読み耽った記憶が蘇った次第。映画「Air Force One」を呼び水にして「スリルとサスペンス」映画にも我を忘れてまた耽りたいもの。

Outsider の映画周辺事情

これまで映画を観て楽しんで来たのは Cinema で主役がボソツと吐く口語表現でカッコイイ「決め台詞」(英語)を聞き取り書き取り口に出して言うて見ることで大満足し映画の全体像は二の次であった事は否めない。考えることの

少なくなつて来た今や些かなりと映画を通じて思考することは貴重。各種 event「坐禅仲間の絵画展・猪俣猛 JAZZ ORCHESTRA 2019・旅行(五島列島で釣り)・山行(那須連山縦走フェスティバルで茶臼/朝日/三本槍登頂)」等に参加して様々な会心の出会いがあり、特別に愉快な思いをした昨今を振り返ると何れも偶然の積み重ね。本との出会いも多くは偶然に本屋の書棚で見つけたものが多い。様々の「偶然の出会い」が人生さえも大きく左右して来た様に思う。偶然出会う映画をあらゆる角度から胸を躍らせて自己流に楽しむことにしよう。お気に入り映画のリストは増えつつある。新たに加えたものに以下の様なものがある。「追想 On Chesil Beach」/「犬ヶ島 Isle of Dog」/「マンマ・ミーア! ヒア・ウィー・ゴー MAMMA MIA! HERE WE GO AGAIN」/「オーシャンズ 8 Ocean's Eight」。これら映画を何時の日か…。劇場で夢見ること思いを巡らす事また楽しからずや。 2019.6.30

× × ×

ユズリユズリ

柳橋和郎

「ラッキー」
すぐに「ラッキー」を柏のキネマ旬報シアターに見に行きました。「ラッキー」は映画の主人公も、また演じる俳優ハリイ・ディーン・スタントンも90才を超えていて、今後の人生の参考になるかと思いましたが。もしも90才以上になって生きていたらこのような元気な90才になりたいと思う映画でした、自由きまままで頑固で一匹狼でお一人様生活を満喫しています。しかし映画を撮り終わった後、俳優のハリイ・ディーン・スタントンはお亡くなりになってしまいました。この映画の公開を待たずにです。映画を見たかぎりでは100才まで生きると思いましたが残念です。ところでおじさんですが、にがりつぶしたような不機嫌な顔で歩いている人を良く見かけます。いろいろあるとは思いますが、もう少しハッピーな顔をしましょうと自分にも言っています。

「終わった人」

映画館に行くところから一枚一枚棚から取ってくるのも楽しみですが、その中の一枚にこの映画があり、面白そうだな、見たいなと思っていました。

「終わった人」は仕事で頑張ってきたおじさんが、定年退職したあとになにもやることのないという、定年で生前葬だなどで始まりです。内館牧子の小説が原作です。ラッキーにもつながる映画です。

千葉県の男女共同参画東葛地域の会議でこの終わった人を取り上げることに、熟年世代の家族のあり方について講演会をひらきたく、講師の選定をしました。こちらのほうは候補をあげて交渉しているうちに少し終わった人の流れから選んでいきましたが、ジェロンテクノロジー(老人工学)の研究をしている東京工業大学の梅室教授にお願いすることになり柏の葉のさわやか千葉県民センターで無事講演会を開くことができました。

終わった人を題材とするということでは原作を読みました。分厚い文庫本でしたが、すらすら面白く読めました。その後映画を見ました。原作を読んでから映画を見る

のはすでにあらずじがわかってしまふのでつまらないかもしれませんが、あそこはこのように表現するのかと楽しむ事ができました。エリート社員が定年の後いろいろトライしてみるけど仕事以上の生き甲斐は得られません。そして遂に生き甲斐となる仕事をヒョンな

ことで社長と知り合い取締役を頼まれます。そこまでは善い色で社長が社長が病気で倒れ、皆から社長になってくれとたのまれ引き受けます。ところが取引先が倒産し、自分の会社も倒産してしまい社長として負債の責任を取ることになってしまいます。財産のほとんどを持っていかれてしまいます。でも簡単に結論を言うと主人公はすばらしい家族を持っているし友達をもっています。なにが人生の墓場だ、いろいろあったけど良い人生じゃん。というのが自分の結論です。おれたかの森ではもうやっていなかったので丸の内東映まで行きました。

「ラストワルツ」

アメリカの有名なザ・バンドというバンドの解散コンサートを描いた映画です。

少林寺拳法の先生石井さんから

突然メールが来て、この映画は見たほうが良いと連絡をもらいました。ただし本人はワルツを題材とした映画と思いついて面食らったようでしたが、多彩なゲストが素晴らしい連絡くれました。映画は当時見逃していたので、すぐ見に行きました。ボブ・デイルのバックバンドとして有名になりメンバーの一人一人がソロでも活躍できる才能のある集団ですがギターリストでありリーダーのロビー・ロバートソンと他のメンバーとの葛藤がありロバートソンが少し浮いている感じがしたのはビートルズの映画「レット・イット・ビー」のポール・マッカートニーと同じでした。

ゲストは、

ボブ・デイル

ニール・ヤング

エリック・クラプトン

マディ・ウオーターズ

ヴァン・モリソン

ドクター・ジョン

ジョニ・ミッチェル

ボビー・チャールズ

ロン・ウッド

リンゴ・スター

ロニー・ホーキンス

ポール・バタールフィールド

ニール・ダイアモンド

エミルー・ハリス

ザ・ステイブル・シンガーズ

このゲストだけでも見る価値有りです。ザ・バンドの演奏とゲストの演奏が楽しめます。特にエリック・クラプトンはザ・バンドの演奏を聞いてシヨックを受けクリムを解散しレイドバックという音楽を目指していくようになりまう。ザ・バンドのメンバーになりたいと言ったそうですがことわられています。そのクラプトンと断ったロビー・ロバートソンとの共演でのギター演奏は見ものです。(キネマ旬報シアター)

「マイジェネレーションロンドンをぶっとばせ」

ビートルズの出現は日本でも音楽やファッションの革命で自分も「ハード・デイズ・ナイト(ピートルズがやってくるヤア!ヤア!ヤア!)」を見てカルチャーショックを受けたのは書きましたが、イギリスではまだこの時代、階級社会が残っていて、たとえば映画の世界でもキングズイングリッシュが話せない、いわゆる労働者階級出身者は主役はできなかったようです。そういった階級社会に若

者のうっぷんがたまったり、どうせだめなんだという希望のない社会に突然出てきたのがビートルズの大成功です。その後ツイッギーやマリィ・クワントとかマリィアンナ・フェイスフルとかローリングストーンズといろいろな若者が活躍始め、日本とは比べものにならないくらい文化大革命だったのだなと思いました。封切りと同時に渋谷文化村まで見に行きました。コックニーなまりの映画俳優で苦勞し、労働者階級のヒーロー

私のお薦め洋画 2019 ②

流 漂 介

● 「バジュランギおじさんと、小さな迷子」(カビール・カーン)
インドで迷子になった、口のきけないパキスタンの女の子を、インド人が宗教の違いを超えて親元に送り届ける。

● 「芳華ーYouth」(フォン・シヤオガン)

中国映画。「戦場のレクイエム」「唐山大地震」の監督。軍の舞踊団に在籍する男女が文革から現代に至る中国において歴史に翻弄されながら生き抜く大河ロマン。

といわれるマイケル・ケインが1964年前後の時代背景を記録したこの映画をプロデュースしコメントーターとして出演しています。

他2本見ました。

最低でも月に1本は映画館に映画を見に行こうと思ったのですが、半分で終わりました。

ところで2019年10月下旬に松戸北部市場跡地に大型商業施設のテラスモール松戸がオープンし、ユナイテッド・シネマがはいるので

● 「僕たちのラストステージ」(ジョン・S・ベアード)

ローレルとハーディの晩年を描く。戦前はかなりの人気があった。戦後人気が陰りが見えたところイギリス国内の舞台を巡業する。その過程が描かれる。ローレル役のスティーヴ・クーガンがいい。ハーディ役はジョン・C・ライリー。

● 「僕たちは希望という名の列車に乗った」(ラース・クラウメ)

社会主義はダメだというのが第一印象。1956年、ベルリンの壁ができる前、東西の行き来が緩かったころ。ハンガリー動乱(ソ連の支配に抵抗し死者が出た。抵抗勢力は反革命と見做された)で

で家から一番近い映画館が誕生します。ということで映画館に行く機会は増やすことができそうです。

後、映画と関係あることですが家の掃除をしている時にある1冊の本が出てきて、小さい頃、隣に住んでいた、いとこが書いた本で、うちの親にプレゼントされた本でした。読んでみると大学卒業後出版社に勤めて映画の月刊誌の編集発行に携わり結構映画関係の人と交流があったようで、大島渚監督のパーティーで野坂昭如が突然監

有名なサッカー選手など死者が出たとのニュースを西独で見た東独の高校生が卒業試験間近にクラスで2分間の黙とうを捧げる。これが大問題になり、首謀者探しが始まり、抵抗した生徒が多く、クラスは閉鎖されてしまう。抵抗した生徒は家族と別れ西側に行き、卒業試験を受ける。

● 「金子文子と朴烈」(イ・ジュンイク)

朝鮮人差別が激しかった戦前の日本。大逆罪で捕えられた金子文子と朴烈のラブストーリー。二人は死刑の判決を受けるが、恩赦によって無期懲役となる。その後、文子は自殺したことになっている

督を殴った時もその場にいたとか、大島渚監督についてフランスまで行ったとかいろいろ書いてありました。出版社に勤めたのは知っていましたが映画の本を作っていたのは知りませんでした。昨年亡くなったのでその前に会って話を聞いておけば良かったと思います。だいぶ前に贈られてきた本で、どうせつまらない本と思ひ読みもしませんでしたが、いろいろ映画の話ができたのではと後悔しました。

● 「ドント・ウォーリー」(ガス・ヴァン・サント)

アルコール依存症の実在の人物ジョン・キヤラハン(ホアキン・フェニックス)が居眠り運転(ジャック・ブラック)の車に同乗し事故で下半身麻痺に、車椅子生活。断酒会に参加しリーダー(ジョン・ヒル)や仲間と話すなかで、多くの人に恨みはあるが(母親に小さいころ捨てられた)、自分を含めて誰をも赦せるようになる。大学に入り、マンガ家として立つことを決意する。脚本も監督。

イラスト & エッセイ

祖母と交わした幼き日の約束

中田好美

祖母を「おばあちゃん」と呼ぶことは一度もなかった。物心が付く頃には、マミー（母を意味する英語の口語）が由来となる「マミ」と呼ぶよう教えられていた。いろいろな人から「なぜ本名と違う呼び方なのですか？」と聞かれ、その理由を答える度に「ハイカラですね」と驚かれた。おばあちゃんと呼ばれたくない祖母の可愛らしい一面であった。

祖母にはたくさんさんの道徳を教わった。幼い頃、買い物の方が分からずコンビニのお菓子を持ち出してしまったことがある。祖母にものすごく叱られた後、無関係な兄も見守り役として一緒に置き去りにされた。走り始めた車をわんわん泣きながら追いかけたのは、今でも忘れられない。祖母の教えはあまりにも強烈で、してはいけないことを一度で覚えてしまうのだ。

祖父の仏壇に供えられた、花束のように振付きキャンデーの一本をこっそり食べたこと

があった。たくさんあるから気付かないと思ったのだが、私の顔を見た祖母が一言。「お姉ちゃん、何か言うことがあるんじゃないかい？」どきりとして、私は咄嗟に笑ってみせたが「笑ってごまかすんじゃない、ちよっうだいと言えあげるので、勝手に食べるのはやめなさい」と叱られた。当たり前前のことを当たり前でできるようになったのは、祖母の厳しくも優しい諭しのおかげでもあった。

祖母と初めて砂風呂へ行ったとき、祖母にスコップで砂をかけていったのだが、「なんだか埋葬されてるみたいじゃないかい？」と言いつつもものだから、笑いが止まらなかつた。砂をかけながら同じことを想像していた私と、感じ方が似ていたのかもしれない。祖母はブラックユーモアを持つ綺麗でハイカラな人であった。

そんな祖母と交わした約束は、幼い頃に参列した親戚の葬儀のことであった。故人と向き合った際、死に対して恐怖を抱いている

私に、祖母は「しつかりと見ておきなさい」と言って、捲られた白い布の下から故人の顔を一緒に見た。恐怖のあまり最初は目を半開きにしながら見ていたが、その表情は眠っているように穏やかで、鼻や耳に綿が詰められていたことを今でも鮮明に覚えている。そのときから、亡き人への恐怖心というものが変わったような気がする。

いつか自分が看取られるときを見越して、私にしっかりと見せたのだろうかと思索したもの、その本心は分からない。火葬後の納骨の際、故人の体格が大きかったのか骨壺に納まらず骨がごりごりと潰されていた。その様子を見た祖母は、「私のときは絶対にあんな風に潰さないでね、頼んだよ」と私に言ったのである。忘れっぽい私が決して忘れなかつた、祖母と交わした最初で最後の約束であった。

転院となった。転院後、間もなく感染症にかかってしまい、高熱にうなされる日々が続いた。中心静脈栄養を行うと高熱が続いたため、末梢静脈栄養へと切り替えることになった。5月から絶食となり点滴のみの状態が続くなか、病院から電話が鳴る度に心がざわついた。人間の死ぬ瞬間とは、どのようなものだろうか。死んだあとはどうなるのだろうか。もしも最期まで一緒にいられるのなら、その瞬間を見届けたい。祖母が終末期を迎えてから、その思いで頭がいっぱいになっていった。祖母の最期と向き合うため、死に際の身体の変化や、より苦しみの少ない最期についていろいろ調べていた。点滴から得られる栄養素はほとんどなく、口から水分もとれないため、喉の乾きを潤すことはできない。長寿となり医療が進化したため、病院は患者をより長く生かそうとする。枯れ木のように細く、穏やかな表情で最期を迎える人々は減り、過剰な点滴による痛々しい青

アザとぶよぶよした浮腫のなか、苦しそうな表情で最期を迎える人々が増えているという。いろいろと調べる前までは点滴は大切な栄養素と思い込んでいたため、できる限り続けた方がよいと思っていた。しかし、終末期について書かれたブログや医師の提案する看取りのありかたなどを読むと、点滴を必要以上にするとう痰が増え、痰吸引や感染症など却って苦しむ場合が多いことを知った。家族と祖母の最期をどう迎えるかを話し合い、苦しみの少ないように、点滴で溺れることのないように、少しでも安らかな最期を迎えられるようにと病院と相談しながら決めていった。

祖母が点滴のみとなつてから、葬儀や戒名などさまざまなことを調べながら、精一杯の想いでおくりたいと思った。葬儀は家族で静かに行える火葬式にし、遺影や骨壺は祖母の好きな色合いを選んだ。費用をなるべく抑えるため、自分たちで用意できるものは通販で購入していたのだが、骨壺を選びながら同じ商品がとて高い値段で葬儀社のパンフレットに載っているのを見つけてしまった。遺影も葬儀社に依頼するとなると、とて

も割高であった。いろいろ調べたところ、葬儀社の稼ぎとなる部分を全部自分たちで用意したものであるから、葬儀社に「この骨壺はどこで購入されたのですか？」と聞かれてしまった。事前に調べる機会がなく、慌てて葬儀を依頼すると高額になることを知ったのでいろいろと勉強になった。

あれこれと準備を進め、いつでもそのときを迎えられるようになった。点滴のみとなつてからは、どれだけ生きられるか誰にも分からなかった。お見舞いにくく度に、少しずつ死へと向かう祖母の姿を見るのはとても辛いものがあつた。眠っている祖母の手を握ったり、顔を拭くことしかできず、やるせない気持ちでいっぱいだった。祖母は人生で何度も生死の境をさまよい、その度に強く生きてくれた。くも膜下出血で倒れたとき、手術をしてもしなくても死ぬといわれたが、手術の翌日には「トイレに行く！」と自分で立ち上がるほど生命力の強い人であつた。そんな生命力の強い祖母は、私たち家族の予想をはるかに超え、春が過ぎ、夏が過ぎ、やがて冬が訪れることとなつた。

2019年1月26日、お昼頃病

院から電話があり、いっどうなつてもおかしくない状態だといわれた。急いで病院に駆けつけると、祖母は胸郭や肩を使って呼吸を行う努力呼吸をしていた。その様子をみていよいよだと覚悟を決めた。努力呼吸になってからの時間を逆算したところ、夜中の1時過ぎに最期を迎えるのではないかと家族に伝えた。もし最期を看取れなくても後悔しないようにと、家族と相談しながら一旦家に帰ることに決めた。病院の帰り道ふと外の景色を見ると、晴れた空に生き物の形をした雲がたくさん浮かんでいた。うさぎ、ペンギン、アザラシ、犬、「こんなにたくさん動物の形にみえるってすごいね」と母に話すと、「たくさんの動物の命を救ってきたから、動物たちが迎えてきているのかもしれないね」と言った。祖母は動物が大好きで、猿、鳥、犬、猫などさまざまな動物に愛情をそそぎ、たくさんの命を救ってきた。そんな優しい祖母の思い出話をしながら家路についた。

自宅で落ち着かない時間を過ごしている、19時過ぎに病院から電話があつた。いよいよかもしれないと伝えられ、最期を看取る覚悟で病院へ向かった。お昼頃とは

様子が変わり、努力呼吸からゆくりと静かな呼吸になり、祖母は仏様のような顔つきになっていた。「安らかに」という想いを受け止めてくれたかのような顔つきに、美しいとすら感じた。休憩しながら交代で祖母を見守っていたのだが、やがて凝視しないと呼吸が分らないほど弱いものとなり、夜中の1時11分頃、ついに呼吸が止まったのである。慌てて看護師を呼ぶと、とても弱い脈だが心臓はまだ動いていると言われた。見守ること10分近く、赤く点滅した心電図モニターとともに医師がやってきて、聴診器やペンライトを用いて死亡確認をしたのち「1時24分、ご臨終とさせていただきます」と告げられた。呼吸が止まってから5分以上心臓が動いていたことにとても驚き、祖母の生命力の強さを最期まで感じることもあった。

2006年1月25日にくも膜下出血で倒れ、何度も生死をさまよいながら13年も長生きしてくれた。手術から生還した日と命日が同じなもの、なんだか不思議な感じがした。震える手で葬儀社に連絡をした後、霊安室でエンゼルケアを終えた祖母と迎えるのを待っていた。線香の香りと蠟燭の揺らめき

がとても静かで、ぼーっと眺めていると心が落ち着くのを感じた。通常ならすぐに迎えがきて安置施設へ移動になるため、祖母と離れることになるのだが、深夜ということでは2時間以上かかったため、祖母との時間をゆっくり過ごすことができた。霊安室は16度の設定で、真冬のなか手足がかじかむように寒かった。そんなとき祖母にそっと触れると、祖母の方がじんわりと温かかった。「ママの方があったかいね」と言いながら、祖母の顔や手にそっと触れてその温もりを感じていた。

火葬当日、花束と手紙を棺に納め祖母に最期の別れを告げた。祖母と交わした約束を胸に「骨壺に綺麗に収まるといいね」と大きめの7寸の骨壺を用意していた。予定より早く火葬が終わり、遺骨となった姿を見た瞬間、胸にこみ上げる想いがあった。「こんなに、こんなに小さな体で、本当によくがんばったね……」祖母の遺骨はほとんどの部位が細かく砕け、原型を留めていなかった。家族一人ずつ祖母の納骨を終えると、残りの部位を係りの方が素早く集めて納骨してくれた。火葬から納骨までがあまりにもスピーディー

で、余韻に浸る間も無く終わってしまった。終末期から最期を迎えるまで、たくさんの時間を与えてもらったからか、悲しみよりも安堵感の方が強かったのが不思議な感じだ。

その日の天気は快晴であったが、北風がものすごく強く寒かった。骨壺を車まで持つて歩く際、焼いた後の温度でじんわりと温かかった。死んでしまったら温度を感じることは二度とないと思っていたが、霊安室で葬儀社を待っている間と合わせて二回祖母の温もりを感じる事ができた。冷えた車内で膝の上で抱きしめるように、祖母の温もりを感じていた。

遺影を毎日みながら思うことは、素敵な笑顔の写真が一枚でもあるといいなということ。成人式の日、玄関先で一緒に撮った優しい笑顔が祖母の遺影となっている。

祖母を看取った後、自身の最期について悶々と考え、尊厳死がテーマとなつている作品をいろいろ観てみた。死を望む人、死の望みを受け止める人、受け止めきれない人、何に苦しみを抱いているのかも作品によつてさまざまである。そんな中でも「老い」にテーマを絞り、登場人物それぞれの視点で

観ることのできた作品をご紹介します。

『92歳のパリエージュ』

尊厳死をテーマに実話を基にくられた作品である。

92歳を迎えた祝いの席で、マドレーヌ（マルト・ヴィラロンガ）は宣言する。

「気力がなくなつて、生活に不便を感じ始めたら、この世を去りたい、あなた達の負担になる前に……2か月後の10月17日に私は逝きます」

戸惑う家族の心情がとても印象深く、娘、息子、孫、家政婦、それぞれの立場と関係性が丁寧に描かれており、尊厳死の受け取り方もさまざまである。日に日にできないことが増えてゆく絶望感、本人にしか分からない。たとえ不自由なことが増えても解決策があるのではないかと、家族がいくら説得しようともマドレーヌは受け入れることはなかった。逝く日に向けて少しずつ準備をするマドレーヌの姿と、そばで見守る娘、ディアヌ（サンドリーヌ・ボネール）の心理描写が忘れられない。母のためと心を決めてさまざまな後押しをする、夢の中で母を射殺する瞬間まで見てしまう。生きてほ

しいと想う気持ちと、母の願いを叶えたいという想いの葛藤に胸が苦しくなった。息子ピエール（アントワーヌ・デュレリ）がマドレーヌの行動に猛反対し、尊厳死を実行するために用意しておいた睡眠薬を鬼の形相で探し回るのも、愛するが故のことである。ピエールが「大事なのはどん底に落ちて愛する人と最期まで過ごすことだ！」と叫ぶ気持ちにもとても共感できる。マドレーヌのように自分が老いたら、ディアヌのように尊厳死を後押しする立場になったら、ピエールのように尊厳死を受け入れられなかったら、どの立場からも考える部分があるので、自問自答をしながらそれぞれの心情に気持ちを重ねて観ていた。

この作品での老いに対する描き方がとても生々しく、祖母の姿や、いざれ訪れる自分自身に重ねてしまい涙がとまらなかった。マドレーヌの入院中のシーンでは、点滴に繋がれた高齢者たちが『そして今は』を歌う。

そして今どう生きればいいのか、これから先の長い人生を、もう誰にも関心を抱けない、今は空しいだけ



君は去ってしまった
誰のために 何のために 夜は訪れるのか
そして意味もなく また朝が来る
誰のために 何のために この心臓は鼓動するのか
こんなに強く
あまりにも強く

この歌が終末期を迎えた入院患者の心情のように感じてしまい、むせび泣いてしまった。祖母が入院していた病院は、終末期を過ごす患者がほとんどである。空を見る目に力はなく、ひたすら点滴を受ける日々。祖母の隣の患者は感染症のせいか、痩せ細った足の甲に青紫色の大きなコブができていた。意識のない患者の足を看護師が優しく手当する姿に、胸が締め付けられた。人はどこを境に、「生きていく」から「生かされている」になるのだろうか。口から食事をとれなくなり、点滴しかできなくなったら延命になるのだろうか。意識のないなか点滴を続け、身体は痩せ細り、そのうち点滴の刺せる場所もなくなる。床ずれができ、身体は硬直し、些細な変化で感染症を引き起こす。自分の意思を伝

えられない患者の医療方針は、見守る家族が決めるしかない。昔ながら口から食事をとれなくなったら、自宅で静かに最期を迎えていた。家庭環境や医療の変化により、病院で最期を迎える人がほとんどだという。そのような状態になる前に、生きる自由と同じように死ぬときを自由に決められるのなら、自分ならどうするだろう。マドレーヌの姿をみながら、そんな思いで頭がいっぱいになっていた。尊厳死をはじめ、活動家のさまざまな話を聞くうちに、自分の最期は自分で決めたいとマドレーヌは思ったのであろう。マドレーヌの「花は死後よりも死ぬ前に欲しいわ」という言葉に「ああ、そうだよなあ」と、とても共感した。尊厳死の執行当日、マドレーヌは色とりどりの綺麗な花に囲まれながら大好きなご馳走を娘と一緒に食べる。娘から優しく包み込まれるように一緒にお風呂に入るシーンでは、娘の愛情深さを感じ、美しい情景のなかに切なさも感じた。マドレーヌは思い入れのある洋服を纏い、綺麗なお化粧をして最期の準備をする。最期まで自分らしくありたいと願う、マドレーヌの静かで美しいシーンであった。家

族に別れの電話をした後、睡眠薬を大量に混ぜて作ったものを口にし、マドレーヌはそのまま還らぬ人となった。

尊厳死に賛否両論あるのも事実であるが、尊厳死を実行できる環境に恵まれ、自分の意思を最期まで貫くことのできたマドレーヌはとても幸せだったのではないかと思った。日々痛ましいニュースなどを見ていると、病气、事故、事件などに巻き込まれず、92歳まで生きられること自体が奇跡のようだと感じている。今後日本で尊厳死についての考え方や法律などが

変わり、自由な最期を選べるとしたら、人々はどのような選択をするのだろうか。この作品を観てさまざまな考えを持つことができた。

日本での尊厳死は認められていないが、最期をどのように迎えたかをリビング・ウイル（生前の意思）を用いて、家族や友人などに伝えることができる。リビング・ウイルとは、「自分の命が不治かつ末期であれば、延命処置を施さないでほしい」と宣言し、記しておくものである。延命処置を控え、苦痛を取り除く緩和に重点を置き、「平穏死」や「自然死」を

望む人々の意思を伝えるのが目的だ。祖母のように認知症などによって自分の意思が伝えられなくなる前に、最期の迎え方について話し合うのは、人生においてとても重要なことだと思った。

死とはどういうものなのか、祖母はその人生をもって、私にかけがえのない経験を見せてくれた。祖母は最期の瞬間まで美しく立派であったため、死への恐怖よりも、どのように生きてどのような最期を迎えたいかが、今後の新しい人生観になった気がする。自分の最期なんて誰にも分からないけれど、

朝が訪れる日々感謝をしながら、限りある時間を大切に過ごしたいと思った。

今日も仏壇の前でそっと手を合わせる。りんを鳴らすと、ある日の祖母とのやりとりを思い出す。「お経を読むから、木魚を鳴らしてくるかい？」一定のペースで鳴らすのが案外難しく、私の生み出す不規則なリズムに祖母は肩を揺らしながら読経していた。厳しくも優しい祖母の姿は、今もすぐそばで温かな笑顔をみせてくれる。

●洋邦2本の話題作

「ROMA/ローマ」(アルフォンソ・キユアロン)

メキシコのあるメイドとその使用人家族の話。1970〜71年ごろ。メイド(ヤリツツア・パリシオ)はボーイフレンドとの間に子供ができてしまうが、ボーイフレンドの方は逃げてしまう。メイドの使用人家族は、医者とその妻、妻の母、4人の子供たち。医者は学会に行くといったまま姿を消す。家族を捨てて愛人のもとに走ってしまうのだ。メイドはおなかが大きくなり使用人の妻の母とベビーベッドを街まで見に行く。

たまたま暴動が起こりその店で拳銃をもったボーイフレンドと遭遇びつくりしてメイドは産気づいてしまう。赤ん坊は死産。このシーン

は長回しで撮っていた。「孤独」な女同士は子供たちと海辺に遊びに行く。そこで波にさらわれ子供二人が溺れそうになるがメイドが間一髪で救い出す。メイドと使用人家族のきずなはさらに強くなる。メイドも死産の後遺症をふつとる。本当は子供を産みたくなかったとの気持ち涙ながらに吐露する。

今年のアカデミー賞監督賞。かつての監督作に「ゼロ・グラヴィティ」「トウモロコシ・ワールド」などがある。監督の映画製作の基

「風待ち」(白石和彌)

重い映画だったが、最後は希望を感じさせた。光を感じさせる。津波にのまれた漁業の町で、ろくでなしが再起を図る兆しをみせる。再起を期すとの思いは誰でも多かれ少なかれ抱くことがあるのでは。俳優がいずれもはまっている。女(西田尚美)は娘(恒松裕里)とともに、パートナーであるぐうた(吉澤健)のいる故郷に帰る。母親は津波にさらわれ、すでにいない。男も仕事の世話をしてもらい

真面目に働き始める。女は娘のことで男と言い争いをして車から人気がない道におろされてしまい、その後何者かに絞殺されてしまう。男は自分の責任を痛感する。好きだった競輪に再びのめりこみ呑み屋に多大な借金を作ってしまう。それまで男に一言も口をきかなかった父親は漁船を売って金をつくってくれる。男は借金を返して残りの金を競輪に注ぎ、一発逆転を試みる。女一家との付き合いが長い氷製造業者(リリー・フランキー)、女の元亭主だった教師(音尾琢真)らが話に絡む。ぐうたら男と女の娘との心の交流が救

(S)

『モリのいる場所』羨望にたえない老境地

久保嘉之

歳をとった所為だとは決して思いたくないし、また言い訳にする心算も更々ないのだが、このころどんな映画を観ても、感動しなくなっている自分を持って余している。それなりに面白そうだなと思える作品を物色して観てはいるのだが、駄目である。

歳をとると時間が短く感じられるのは、好奇心が希薄になっていくからだ。何かのテレビ番組で言っていたが、本当のところ自身認めたくないだけで、好奇心どころか感性まで摩耗しているのかもしれない。

仕方がないので当り障りのないテレビドラマで、飢えを満たすしかないかと半ば諦めかけていた矢先に出会ったのが、『モリのいる場所』であった。実に面白かった。たいして期待していなかっただけに、驚きはひとしおであった。同時に心から内容を愉しみ、しみじみとした感動すら覚えている自分をそこに見出すことができて、安堵すら覚えることが出来た。

脚本・監督は沖田修一。昭和五十二年九十七歳で没するまで、生涯を現役で通した実在の画家熊谷守一の、晩年のとある夏の一日に焦点を当て、そこに彼の言動や思想、人生観や芸術観、妻秀子への思いや、彼を取り巻く人達との関係を、圧縮して様々なエピソードとして詰め込んだ構成となつていく。勿論フィクションである。

通称モリこと熊谷守一を演じるのは山崎努、妻秀子役は樹木希林。これ以上のキャストイングは、まづなかる。見事に老夫婦の距離感というか、空間を紡ぎ出している。

また沖田監督も、エピソードのひとつひとつを笑いといるオブラートで包み、悪ふざけにならない節度で、出来事を深刻に捉え過ぎない柔らかな視線を、登場する人達に投げかけている。こういった演出法が、私は嫌いではない。冒頭にして、そうである。昭和天皇と思しき人物（実はこの役を演じているのが林与一。天皇によ

く似た雰囲気の人だなとは思ったが彼だとは気付かず、ピリングに名前を見つけ、どこに出ているのだろうと本編中眼を皿にして捜したのだが、それでも判らなかつた。が、展示してある熊谷守一の絵をご覧になり、

「これは何歳の子供の描いた絵ですか？」側近にお尋ねなられる。原色を用いた大胆な筆使いで形体を単純化して描く、所謂フォーヴィズムの画家として熊谷は位置付けられていたが、晩年は更に進化を極め、熊谷様式と呼ばれる極端なまでに形が単純化され、それらを囲む輪郭線や平面的な画面構成で、抽象度の高い具象化スタイルを確立させる。そういう彼の〈絵〉は、彼自身の言葉を借りると「へたも絵のうち」、幼児が描いた絵と見た目変わりはないのである。

アトリエのシーンを挟んで、モリの家の庭が横移動で映し出されるのだが、よく観ると、よく観なくとも、モリの顔がだまし絵もど

きに、木々の葉の間に鎮座している。そこがモリの居場所なんだよと言わんばかりに、そしてタイトル。

変わらぬ日常。モリは帽子を被り、両手に杖を突いて、自宅庭の散策ならぬ探険に出かける。当人によれば五十坪足らずだったといふことだが、実際には三十坪にも満たない広さだったらしい。それでも彼にとつては小宇宙である。

鳥が飛び交い、草花が息づき、昆虫が跋扈する。モリは自然観察に楽しみを見出し、動植物の形態や生態を描くことに精力を傾けた。

モリは歩き慣れた庭の隅で、見慣れぬ小石を見つけ手にする。

「どこから飛んできたのだ？」これは、このすぐ後に登場する三上博史を絡めた伏線。

——風呂敷に包んだ白木の板を手にした、ひとりの男がモリの元を訪れる。高名を聞きつけ長野から看板への揮毫を頼みにやって来た、温泉旅館の主人（光石研）である。人嫌いなモリの性格を知つ

ている秀子は断るが、懸命の懇願をわざわざ遠くから訪ねてきてくれた手前もあり、無碍に斥けることもならず、結局引き受ける事となる。この折、モリの家に屯して

いた連中の中から、何時現れたものかひとりの男が、旅館の主人に、「誰だか知らないが、モリに書いて貰うなんて、一生感謝しなさいよ」次いでモリに向かい「モリもモリだよ。こんな見ず知らずの男に書いてやるなんて……ああ見ていられない、私は失礼する」大仰に嘆じて家を飛び出して行ってしまう。残された者全員「今の誰だ？」と不審顔。この役を演じているのが三上博史、変わったキャスティングだと少し違和感を覚えたのだが、まさしくこれこそ伏線だったことが後で判る。

しかしながらモリが書いたのは、旅館名の雲水館ではなく「無一物」という言葉であった。これは彼の好きな言葉で座右の銘に等しく、よく揮毫したらしいのだが、旅館の主人にしてみれば当惑極まりない「書」であった。熊谷宅を辞する面持ちには慥然たらざるを得ない。敷地の塀には、「マンシヨン建設反対」「熊谷守一の芸術を守れ」の立札が、幾つも並んでいる。ど

うやらすぐ近くにマンシヨンが建つらしい。

モリに惚れ込み、半年通い詰めでは彼の写真を撮り続けているカメラマンの藤田（加瀬亮）が、アシスタントの公平（吉村界人）を連れて、やって来た。早速藤田はモリの機嫌を損なわぬよう気を使いながら、シャッターを切り始める。就中件の小石に微動だにせず眺め入る姿に、何かを感じたのか触発されたのか、憑かれたように撮りまくる。後ろで見ていた公平が、感に堪えない様子で、「凄いですね。見た目完全に仙人ですね」

藤田は、仙人と言われるのを先生一番嫌がるんだから口にするんじゃない、と嗜めながらも、自らしみじみと、
「もう三十年もこの庭から一歩も外に出てないんだぞ。天狗か仙人でなくて何なんだ」述懐するのである。

昼食時である。箸使いが苦手なモリは、カレーうどんの汁を襟元に零してしまう。拭き取っていると、そこに電話。応対していた秀子が振り返り「文化勲章を下さるそうですよ」。

昼食を共にしていた面々は、思

わず驚きの声を上げるが、当のモリは、

「要らない。そんなものを貰ったら人がいっぱい来るよ。……袴は穿きたくないし」

秀子も手慣れたもので、「それもそうやね」合点すると「要らないそうですよ」電話を切ってしまう。次のショットは叙勲の電話をかけた嶋田久作演じる官僚の、信じられないといった表情。台詞なし。嶋田はたったこれだけの出番だが、あるとなしでは余韻に大きな差があるショットである。熊谷守一は、同じ伝で勲三等も辞退している。

テレビで、「超俗の人 熊谷守一」と題された特集番組が放映される。加瀬はその様子をカメラに収める。番組の中でモリは、何と三十年近く自宅の敷地から一歩も外へ出ず、庭の動植物を描き、金や名声には関心を持たず一途に絵と向き合っている画家として紹介され、そうしたことから「画壇の仙人」と呼ばれています、そう結ばれていた。

実のところ三十年というのは盛り過ぎで、七十六歳のおり軽い脳卒中で倒れて以来、長い時間立っていると眩暈がするようになったため、外出を控えるようになり、

そのままその状態が続いたということらしい。

秀子は「あなた仙人なんですかア」皮肉めかして言うのと、「仙人が表を歩いたりしたら噂になりますから、外へ出ないで下さい。みつももないですから」冗談とも本気ともつかぬ口調で、駄目出しをする。その言い方が業腹だったのか、モリは例の二丁杖で敢然と外へ出て行く。のだが、少し行ったら辺りで小学生の女の子と眼が合い、睨みつけられて、恰も鬼に出会ったかのごとき恐怖を覚え、慌てて逃げ帰ってしまうのである。これは笑えた。

午後、建設中のマンシヨンのオーナー（吹越満）が、現場責任者（青木崇高）を伴って、建設反対の看板に対する苦情を申し立てに、やって来る。応接は秀子。マンシヨンの建設は以前から決まっていたことであり、看板を撤去しないと訴えるというのである。秀子は怖々反論する。「だけど日当たりのことは何も言ってませんでしたよ。庭に日が当たらなくなると困ります。この庭は主人のすべてでやからね」

だが青木の狙いは別にあつた。借りようとかかった当のトイレで、

おそらく潜み隠れていたであろうモリと、鉢合わせするのである。これ幸いと青木は持参していた息子が描いたという台風の絵の批評を、求める。暫く眺めた後、

「へたです」モリは言い放つ、

「へたですね。へたでいい。上手は先が見えちまいますから。へたも絵のうちです」——これはモリの、絵画に対して一貫して変わることはない、姿勢である。自身の著作『へたも絵のうち』で、彼は述べている。「つまるところ絵というものは、自分を出して自分を生かすしかなく、自分にならないものを、無理に何とかしようとしても、ロクなことにはなりません。へたな人は、自分を生かす自然な絵を描くため、へたな絵を描くことです」

よく右足が吊るお手伝いの美恵ちゃん（池谷のぶえ）が、沢山の肉を買ってきた。貰い物の分もあつたため、持て余す量になつてしまった。そこで食べ盛りの若い人達を呼ぼうということになり、招かれたのが青木を筆頭とするマンシヨンの建設作業員たち。宵闇の中、丸い灯りが一列になつてこちらへやってくる。何かと思えば、各々のヘルメットに装着されたライトである。このシーンに、音楽担

当の牛尾憲輔は、モリコーネ張りのマカロニ・ウエスタン調の曲を、被せるのである。何とも楽しい。大宴会である。そのさ中、モリ

は池の辺りで小さな灯りが動いているのに気付く、庭へ出る。近付いてみると、それは昼間家を飛び出していった三上博史であった。だがその額からは、提灯鮫鯨のように釣竿状の角が生え、先端が丸く明るく輝いている。つまり彼は異星人？ そして拾った小石は、隕石？ 彼は言う、

「あの池はどうとう宇宙へと繋がりました。一緒に行きませんか。この狭い庭から外へ出て、広い宇宙へ行きたいとは思いませんか？」

このエピソードは、幾つかの解釈が出来ようかと思う。最初私は、三上は天寿を全うしたモリを「死」の世界から迎えに来た使者かと思つたのだが、おそらく違う。ここは素直に三十年近くをそこで息づき、生きとし生きるものすべてを愛したモリとその庭が、世間一般或いは常識から隔絶した本当の小宇宙を形成し、モリが願ひ理想とした、すべての生物が穏やかにそして隔てなく生きることのできる大宇宙へと発展、もしくは繋がつ

た——私はそう理解したい。だがモリは秀子を愛していた。そして歳をとり過ぎていた。

モリは申し出をきっぱりと断る。「いえ結構、私はここにいます。この庭は私には広過ぎます。ここが充分。それにそんな事になつたら、また母ちゃんが疲れちまいますから——それが一番困る」

モリが目覚めた時、件の小石をしっかりと握りしめていた。夢だつたのだ。宴会はすでにお開きになり、みんな引き上げてしまつていた。茶を喫し、秀子と碁を指しながら、モリは尋ねる、

「もう一度人生を繰り返すことができるとしたら、どうかかな？」

「それは嫌だわ。だって疲れるもの。あなたは？」

「おれは何度でも生きるよ。今だつてもつと生きたい。生きるのが好きなんだ」

「そう、ですか」そう言つた秀子の、いな樹木希林の表情を、この先私は忘れることはないだろう。演技で、表情ひとつでここまで表現できるものなのか。

「こんなに長く生きちゃつて……ウチの子たちはあんなに早く死んじゃつて……」

モリと秀子には、五人の子が生

まれていた。しかしながらそのうち三人を亡くしている。赤貧ゆえである。次男陽が三歳という幼さで肺炎を患い亡くなった時も、金が無く医者に見せることも出来ず、ただ自宅で看取ることしか出来なかつた。秀子からは「絵を描いてください。絵を描いてください。何とかお金に変えることが出来ますから」幾度懇願されても、絵筆を執ることは叶わなかつた。それがである。死んだ息子の顔を見ているうちに、

「三歳で死んだこの子は、後に残す何も持たない。それならばせめて死に顔だけでも残しといてやるべきではないか」いつの間にか、絵を描いていたという。そのことに自ら気付き愕然とする。

「何ということだ。これはまるで鬼畜の所業ではないか」

多分だが、モリが生きているのが好きだと言つた背景には、自ら望んで選んだ道とはいえ経済的に家族を支えられなかつた所為で、生きたくとも生きることが叶わなかつた我が子たち、彼らの分まで生きたい、生きなければならぬという、贖罪の思いがあつたのではなからうか。だからこそ動物・植物を問わず、命あるものすべてを愛

したのであろう。

秀子は違った。違ったはずである。母親であればこそ、お腹を痛めた我が子に先立たれる辛さ、悲しさ。それもお金さえあれば、救えた命なのである。悔しかったと思う。亭主は怠惰な人ではない、だがお金に縁のない人だった。恨んでも仕方がない。それが「疲れますから」という返事になったものだろう。もう二度と同じ苦しみ・嘆きを繰り返したくはない。そ

れなのにモリは「生きるのが好きなんだ」という。

「何を能天気なことを。あなたはいいですよ。好きな事だけやっていけばいいんだから。私はあなただの世話をし、子供たちの面倒を見、看病をし、死んでいくのをどうしてやることもできなかった。もつともつと生きたかったらうに……」——その複雑な心持を、樹木希林は見事に表情に出した、私はそう思う。

■著者近況等(順不同)

中田好美 〓シネマ気球29号から参加させていただき、今号で10年目となりました。部活や習い事等、いろいろなことに挑戦してきましたが、10年続けたのは初めてです。執筆した文章がこうして形となることに感謝の気持ちでいっぱいです。

押切令子 〓行き当たりばつりに旅ができるよう、車を少しだけ大ききものにしました。大きな目的地を決め、あとは寄り道を楽しみながらの気まま旅を楽しんでいます。

堀江広子 〓つらつら振り返って見ると平成の三十年間というのは、人の暮らし方がアナログからデジタルへ移行していった時代で、経済格差も広がり、地下鉄サリン事件や自然災害、原発事故と恐ろしい出来事が次々と起きました。令和の時代はその

後始末や対策に苦心していかなければならないのでしようね。

片桐公男 〓今年の春はカメラ片手に花を求めて歩いた。いくつかさげると、3月は古河の公方公園の花桃、竜ヶ崎市の般若院の枝垂れ桜、上野界隈の桜、4月には野田市桜木神社の枝垂れ桜、群馬県館林の鶴生田川の桜と鯉のぼり、皇居東御苑から北の丸の桜等々。多い日は10kmほど歩くが、40年を超えるジョギング歴がそれを支えてくれる。

門馬徳行 〓月に叢雲、花に嵐の例えもあるが、まったく先が読めない今日。この世は乱れまくり「恩」とか「約束」という言葉が失われているような気がしてならない。お互いの決め事も、離れてしまえばしらん顔。恩義が廃ればこの世は闇。もう、他人などどうでもいい。自分の論理だけが優先される世界になり果てた。

マンションが竣工した。いつものように写真を撮るべくモリの家へ向かっていた藤田は、その前を通りかかり、ふと思いついて屋上に上る。モリの家を俯瞰で撮ろうと決めたのである。準備をし、カメラを向ける。その先には、いつもと変わらぬ熊谷守一家の、日常があった。

むしろ曲がりくねって、勾配のきつい道の方が多かった。それでも今は恩讐を乗り越え、駑蕩として流れる時間の中で、ふたり手を携え共にいる。「文句はあるけどいつまでも二人で」この映画のキャッチコピーである。夫婦とはそういうものなのかもしれない。

ありきたりの感想で甚だ恐縮だが、モリにしろ秀子にしろ平坦な道ばかり歩んできた訳ではない。

こういう老後が送れたらいいな、羨ましいな、軽い興奮の中でそう思ったら、不覚にも涙が零れそうになった。

誠意が置きざれにされた世界に明日はない。そんな世間に背を向けて、どこに行くのか渡り鳥、止めてくれるおつかさん。背中のイチョウが泣いている……。

逢えると楽しいです。関田孝正 〓少林寺拳法の道場に入門して9か月。3月に6級の試験に合格、いま7月の5級の試験に向けて練習中。技が細かくて難儀。

岩館範子 〓梅雨時期、ムシムシで暑いと思っていたけど、ここ青森県は雨が降ると寒い。ストープをつけるくらいだ。やっぱり東京とは距離を感じてしまう。仕事を始めたし、気ままな1人暮らしと違って、家族がいるとやる事が山ほど。映画やその他趣味に費やす時間を作るのが難しい。この生活も続ければ慣れてくるのだろうか？映画をたくさん観て、泣いたり、感動したりしたいなあ。

宇井相 〓材料：Aオリーブ油、Bにんにく、Cポップコーン、D塩と胡椒、各適量。工程：鍋にAとBを入れ弱火。適宜CとDを投入し、強火。自宅シネマのお供に召し上がれ。

久保嘉之 〓昨年亡くなられた希林さん。癌を自ら告白されたからの仕事ぶりとは違った意味で、羨望にたえない。私ごときに真似できる訳もないのだが……。

山下雄平 〓6月18日から24日までの一週間、京橋の金井画廊で、3回目の油絵の個展を開催しました。見に来ていただいた方には感謝いたします。大学漫研時代の女子にも再会!!

森田洋一 〓①すき間時間を無理にでも作り、劇場へ足を運んでいます。②自分だけの特別な時間的。③劇場の新作と名画座上映のハリウッドかフランス作品。④お気に入りに出

イーストウッド、老いてはますます盛ん

「運び屋」(監督Ⅱクリント・イーストウッド)

クリント・イーストウッド監督39作品目は、実在した麻薬の運び屋の話だ。90歳の運び屋を監督自身、実年齢(89歳)のまま演じた。

主人公アール(イーストウッド)は朝鮮戦争に従軍した経歴をもち、軍人会のメンバーでもある。デイリーという一日しか咲かない花の栽培家で、業界で表彰されることもあるように仲間うちでは知られた存在だった。しかしインターネット販売に負けて廃業、家は借金のかたに没収されてしまう。時代に乗り遅れてしまった。彼は仕事ばかりで家族を顧みない。娘の結婚式にも仕事で理由で参加できず、娘は父親に失望、それ以来娘は父親に背を向けるようになった。女たちからは自分本位の男と思われ、妻とも離婚。孫娘は成人して、かろうじて彼女とは心の交流がある。悪い男ではないのだが、家族への気配りがないために損をしている。アールは晩年自分の人生を振り返る。これでよかったのかと。人生、順風満帆とはいかない。それは映画を見ている私にも、いや私に限らないだろうが、これでよかったのかと……。

アールはある日、荷物運搬の仕事をお願い負う。高額の収入。運ぶものは麻薬とすぐわかるが、借金のかたに没収された家を取り戻したり、軍人会の事務所が資金難で困っているのを救うには金が必要だ。必要に駆られて運び屋として仕事をする。犯罪に加担しているのだが、後ろめたさはあまりない。深刻にならずにラジオから流れる歌を口ずさみながら車を運転する。運び屋の仕事は順調にすすみ、密売組織はアールに多くの麻薬を運ばせようとする。見張りもつくようになるが、そんなことも気にせず運送屋に徹して黙々と麻薬を運ぶ。途中、人の車がパンクして立ち往生しているのを見て修理を手伝ったり、寄り道をしたりして自由気まま。見張りの連中は脳目も振らずに仕事に集中してほしいと思っている。密売組織のボス(アンデ

イ・ガルシア)は捜査当局から摘発されないので、アールの自然な態度が捜査陣の目を欺くために有効だと見抜いている。一方、麻薬捜査官(ブラッドリー・クーパー)は血眼になって密売ルート・運び屋を追っている。

高額の報酬に魅かれて始めた運び屋の仕事。裏社会の怖い人に囲まれながら、警察の追及の手をかわしながら、果してアールの行く末は。家族との和解はあるのか……。

この映画はイーストウッド監督作の中でもベストに近い映画だ。人生を考えさせる。イーストウッドの映画人生をも。

イーストウッドは、「荒野の用心棒」(1964。イーストウッド34歳時の作品。監督Ⅱセルジオ・レオ

ーネ)、「ダーティハリー」(1971。41歳。監督Ⅱドン・シーゲル)

などで俳優としての地位を確立した。「荒野の用心棒」は高校生の頃に見た。砂埃にまみれ布きれ(ボンチョ)というのか)を身にまとい葉巻をくわえた髭面のガンマンが町の悪を一掃して去っていくというエンニオ・モリコーネの口笛を使った音楽も印象的な痛快な一作だった。当時、映画界の閑散期である2月に東宝では黒澤明週間という旧作2本立ての興業があり、この頃、「用心棒」(1961)を見た。「荒野の用心棒」とストーリーが同じだったが、これも面白かった(本家本元だから当然)。その後著作権等の問題が起ることになるのだが、黒澤明が「荒野の用心棒」の試写を見て「面白い」と一言つぶやいたというような記事を映画雑誌で読んだ。「黒澤、太っ腹」と思ったものだが、映画会社は金銭のやり取りで問題解決を図らなければならず、興行収入の何%かを東宝に納めるということでパクリ問題は収束したようだ。

イーストウッドは俳優としてばかりでなく監督としても手腕を発揮した。初監督作品はラジオの人気DJ(イーストウッド)に女性のストーリーカーがつかまとうサスペンス「恐怖のメロデー」(1971。41歳)だ。監督の手腕を発揮できる俳優は何人かいるが、コンスタントに作品を作り続けている監督はイーストウッドのほかはあまりいない。ウッディ・アレンぐらいか。イーストウッドの

監督作品はどれも面白い。監督のスタイルは、自分でシナリオを書くことはなく演出に専念するというもの。面白くシナリオを選んで、そのシナリオの面白さを損なうことなく映画化する能力に長けていることだろう。監督作は他の俳優が主演したものばかりでなく自分で主演したものも面白く撮ってしまう。

イーストウッド監督作で印象に残るのは、人間の善悪を問う異色西部劇「許されざる者」(1992。72歳。主演も)、女性プロボクサーとトレーナーを描いた「ミリオンダラー・ベイビー」(2004。74歳。主演も)、頑固じいさんと隣に住むアジア系の少年との交流を描いた「グラン・トリノ」(2008。78歳。主演も)、神隠しにあった息子を探す母親の実話「チェンジリング」(2008。78歳。主演Ⅱアンジェリーナ・ジョリー)、イラク戦争の伝説のスパイパーを描いた「アメリカン・スナイパー」(2014。84歳。主演Ⅱブラッドリー・クーパー)などだ。老齢化するほど味が出てくる。

イーストウッドも今や90歳(1930年5月31日生)、あと何本面白い映画を撮ってくれるのだろうか。

(関田孝正)

【編集後記】今回は高齢社会を反映して老いや死を見据えた文章が多かった。中田好美さんも書いてるように、「限りある時間を大切に」を肝に銘じて。

(関田)